

---

# <インフィニット・ストラトス> 金と銀の瞳が見据えるモノ

火炎爆発

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

<インフィニット・ストラトス> 金と銀の瞳が見据えるモノ

### 【Nコード】

N4625V

### 【作者名】

火炎爆発

### 【あらすじ】

オッドアイでいじめられ続けた主人公、磨美・アーデルハイトは入学したIS学園で自分を救ってくれた初恋の人、織斑一夏や小学校の時の友人に再会する。

<インフィニット・ストラトス>金と銀の瞳が見据えるモノ…  
…ここにスタートです！

## プロローグ(前書き)

ははは……！

ついにやっしまった！

革新される〜ほっとからして投稿しちゃった！

## プロローグ

私の名前は磨美・アーデルハイト

名前からわかる通りハーフだ。イタリアと日本の。

私には金と銀の目がある

かつこよく言ったらオッドアイ。

本格的に言ったら虹彩異色症。

朝、私はいつも通り小学校に登校した

「あ、バケモノが来たぞー！逃げろー！」

私はバケモノ扱いを小学校の時受けていた。

でも仕方ないことなんだ

オッドアイだもの。

「こっち来んなっバケモノ」

「いたっ……………！」

石ころも投げつけられた。でもそれも仕方ないこと

オッドアイだもの。

その時の私は自分をいじめたりするやつを黙って容認してた。

オッドアイだもの。

回りから奇異の目で見られるのは仕方ないこと。

「……………」

「死んじゃえばいいんだ！あんなバケモノ！」

そう言うけど、何度もリストカットしてるんだよ？

「おい」

突然、近くにいた男子が近寄ってきた

「……………なに」

どうせこの人も私を馬鹿にするんだろうなあ……………

「あんな事を言われて黙ってられるか？」

「……………え？」

「目の色が右と左で違うだけで他の人と何にも違う所がないのにいじめられるのを黙ってられるか？」

その男子は今までの男子と違った。

私がオッドアイにもかかわらず、普通に話してくれる。

「やだ……………いやだけど……………」

「いやだけど？」

「……………仕方ないことなんだよぉ……………！」

私は泣いてそう言った。

「あー！バケモノが泣いたぞー！」

「……………お前ら……………！いい加減にしろよっ！」

ポカッ！

「……………！？」

私は目の前で起こった事にびっくりした。  
さっきの男子が私をいじめてた男の子を殴ったからだ

「……………な、何すんだよっ！」

「お前らこそ何やってんだよっ！あの子はただ目の色が右と左で違  
うだけでなんでいじめてんだよ！？」

「そ、それは……………」

「答えられねえじゃねえか！」

「……………」

私をいじめてた男の子達が黙って、帰っていく

「ふう……………あ、大丈夫？」

「……………うん」

「あ、まだ名前聞いてなかったね、なんていうの？」

「……………磨美」

「え？もう一回言って」

「磨美・アーデルハイト」

「かつこいい名前だなー！あ、俺は織斑一夏、よろしくなっ！」

そう言っつて織斑君は手を差し出してきた

私は一気に赤くなった。だって……………一夏くんに恋をしちゃったから

……………

「わっ、顔が真っ赤だぞ！熱は？」

「……………大丈夫だよ！よろしくね、一夏くん」

それが私と織斑君の出会い。

月日は流れて私は十五歳になった。

オッドアイはカラコンで隠してる。

私は目の前にある寄せ書きをみていた。

そう、私は転校した。

小学校六年生の最後、卒業式以来一夏くんとは会ってない

「……………そういえば一夏君は高校どこに行くのかな」

私の進路は決定済みだ。

IS学園にイタリアの代表候補生として入学する事が決まっている。

「一夏くんは男子だし、同じ高校は無理だろうなあ……………」

そんな事を言いながら私はテレビをつけた。

その時、私の目に見覚えのある顔が出てきた

「いち……………か……………くん？」

そのニュースは世界で初めて、男性のIS操縦者が出現したというもの。

そして、一夏君がIS学園に入学する事が決まっている事をニュースで知った。



「……一夏くと……同じ高校に行けるの……!？」

私の中で喜びが一気に沸き上がってきた

「いやったあああああ！」

「磨美!うるさいわよっ！」

下からお母さんの怒声と箒で天井をつつく音がした。

「ごめんなさい！」

私は一気に沸き上がってきた喜びを抑えるためベッドで寝た。

けど眠れない!

ふふふ、早く入学式が来ないかなあ〜

## キャラ設定(前書き)

指摘があったので書き直しました

ヒップ 60?

ヒップ

77?

になっています。

## キャラ設定

キャラ設定です

磨美・アーデルハイト

性別 女

肩書き イタリア代表候補生

身長 165?

体重 ヒミツ

血液型 O型

容姿 上の上(美人とかそういう系)

瞳 金と銀のオッドアイ(普段はカラコンで金を隠している)

髪 茶色。染めていない。

体つき バスト100? ウエスト65? ヒップ77?

趣味 ISをいじること 読書

好きな物 織斑一夏 自分のIS ラノベ

嫌いなもの 肉 炭酸飲料

備考

小学生の時、いじめられていたがその時、一夏に助けられた。

その後イタリアに家族丸ごと引越して三年間一夏と会えなかったがその間に性格を暗くしてじめじめした性格から、明るい性格にチェンジした。

専用機『ネーブ・テンペスタ』を所持

ちなみに彼女のESスーツは特殊で上半身と下半身がわかれており、ヘソ出しになっている。

しかし、上半身のスーツからは胸が若干はみ出ており、下乳が露出しており、さらに下半身もTバックになっているなどかなり露出が高い仕様になっている

本人は『一夏がこっち向いてくれるならこのままでいい』と言っており、さらさらESスーツを注文する気は無いらしい

## 再会

今はIS学園の入学式が終わって私は自分の席に座っている

今は自己紹介タイムで一夏くんが自己紹介をしてる

「織斑一夏です」

「……………」

沈黙が続いた。

まあ、一夏くんは緊張とかすると頭の中が真っ白になっちゃっからあんな地味…………地味じゃないね、シンプルなあいさっしか出来なくなっちゃっからね〜

「……………以上です」

ガタタツ！

その時、教室にいた女子のほとんどがずっこけた

私？私はずっこけてないよ。

……………だってスカートの中見えちゃうもの。

バシィッ！

「自己紹介もまともにできんのかこの馬鹿者」

「げっ、関羽!？」

さらにもう一発バシィッ!

「誰が三國志の英雄か、馬鹿者」

「フツ…!フフフツ…!」

あ、笑っちゃった。

この厨二病じみた笑いかた、直らないのよね

「フフフ…、変わらないなあ、一夏くん!」

一夏 side

「フフフ、変わらないなあ、一夏くん!」

……? あいつ……誰だっけ?

俺の事を知っててそんでもって一度……いや何度も会ったことがあるような口振りだけ……

「アーデルハイト、うるさいぞ」

「あ、すみませんでした」

アーデルハイト？

俺は日本人の友人と日本人と中国人のハーフと日本人とイタリア人のハーフの友人しかつくった覚えはないぞ？

でもどつかで聞いたことがある名前だなあ……アーデルハイト……  
アーデルハイト………あ！

「何を呆けている！」

バシィン！

ああ、また俺の脳細胞が天に召された………！

side out

「何を呆けている！」

バシィツ！

あーあ、一夏くんやつと思いついたみたいだったのにい………！

織斑先生ひどいよお！

私の理想の再会のしかたの邪魔しないでほしいよお！

「お前の理想など知ったことか」

心を読まれた！？

なにこの人、人間から進化した存在になったの!?

「諸君、私が織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛えぬくことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

「キヤーー！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様にあこがれてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて、嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

うるさいな……………

そんな事をしてたら織斑先生の強烈な鉄拳制裁が下るよ？

「…毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

たぶん後者の方だと思います、織斑先生

「きゃああああっ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」



「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をして〜！」

……あれだけ叫んでおいて、まだ喉が潰れないんだ……みんなすごいなあ。

「まあ、いいだろう。これでSHRは終了だ。諸君らにはこれからISの基本動作を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくとも返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

なんか強制されてるけどたぶんみんなは従っちゃうんだろうなあ。

無論私もだけどね、本物のブリュンヒルデの指導を受けられるんだもん。

そんなこんなでSHRは終了した。

休み時間の一夏くん所に行こうと

## 再会（後書き）

はじめ磨美の笑い声をクフフにしようかと思ってたんですが、それだと目に六の文字が刻まれたパイナップル頭のやつと被ってしまふので、フフフに変更しました。

## IS説明(前書き)

自分の好きなガンダムを合体させたみたいになっています

## IS説明

IS説明だ！

機体名    ネーブ・テンペスタ

パイロット    磨美・アーデルハイト

### 機体概要

赤と白のカラーリングのIS

最大の特徴は背中に四枚ついている翼の形をしたウイングスラスト  
！。

これにより、二段階ダブルイグニッションブースト瞬時加速が可能になっている。

脚部の装甲には隠しビームブレードが装備されているなど風変わり  
な武装が多い

### 武装

ビームデスサイズ×2

巨大なレーザー刃の鎌。連結させ、ブーメランのように投げられる

マシンキャノン

肩部に装備されている実弾装備。威力は低いが連射が可能。磨美はこれを牽制に用いる。

バスターライフル×2

二挺装備されており平行連結させる事でツインバスターライフルになり、大火力を実現させることができる。連結させた時の名称はオルトロス

脚部隠しビームブレード×2

両足のつま先から発生させる事が出来る武器。エネルギーを調節すれば一夏の零落白夜と同等の威力を発揮する

ブレードブーメラン

名前の通り、Y字型のブーメラン。実体の刃がついている。投擲のためにブーメランになっているのだが、磨美は接近された時にこのブーメランを相手に直接ぶつけるといいう手荒な戦法を取る。

腰部ビーム砲

腰のアーマーに装着されているビーム砲。

実体シールド兼ビットホルダー

右腕にマウントされている円形の実体シールド。その円周に円錐形のビットが5つマウントされている。

レーザービット×5

シールドにマウントされているレーザービット。空間認識能力の高い人間しか扱うことが出来ないという欠点をもつものの、磨美のパイロットとしての能力でその欠点を補っている。名称はローンディネ

ミサイルコンテナ×2

両腕にマウントさせる武装。ミサイルは最大五十発まで発射可能。名称はフルーミネ

結構武装あるなあ……

## IS説明（後書き）

見た目は背中の装甲はウィングガンダムゼロ、腰はフリーダムガンダムです

実体シールドですがプロヴィデンスガンダムの背中の装甲がそのままシールドになったと考えてください

## 授業中は暇なんです

「枠内を逸脱したIS運用をした場合、刑法によって罰せられ・・・

」

副担任の山田先生が教科書を読み上げていく。

……だけど暇だ。

ISの代表候補生にとって座卓の授業は復習にしかない。

もちろん復習も大事だよ？大事なんだけど勉強よりいろんな事をやりたいのがこの年頃の女の子の本音だよ。

一夏くんの方を向くと一夏くんは頭を押さえてた。

やっぱりかっこいいなあ……精神的にも外見的にも。

バシィッ！



「あつっ！」

「代表候補生でも授業はちゃんと聞け」

「す、すいません……でも一夏くんが……」

「織斑がどうし　　ああ、成る程」

……かつこよくてつて言おうとしてたんだけど

織斑先生は一夏くんの方向を向いて、こう言った

「織斑、さつきから頭を抱えているが、どうした」

「え………！あつ………」

あー、なーる。一夏くんはわからない所があったから頭を抱えてたんだ。………つて、オイ私。気づくのが遅すぎるぞ。

「織斑君、わからない所があったら聞いてくださいね。何せ私は先生ですから」

えっへんと胸を張る山田先生。

「先生！」

「はい、織斑君！」

「全部わかりません」

わああ！部分的にわからないのになって思ってたらまさかの『全部  
わかりません』ですか！

「全部……ですか……？」

山田先生の顔がひきつっている。

「えっと……今の段階で授業がわからないって人はいますか？」

山田先生が拳手を促すけど、誰も手をあげない

無論、私もね。

さっきも言った通り、座卓の授業は復習にしかない。

「織斑、入学前に渡された参考書を読んでいないのか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました。」

ゴッ！

わっ、今角で殴ったよ！？……頭蓋骨にひびとかいってないかな……

「必読と書いてあったらだろっつが馬鹿者」

誰にでも容赦ないなあ、織斑先生。

でもだからこそ世界一になれたと思うんだけどね。

「再発行してやるから1週間で覚える」  
一夏くんは無理つて言おうとしてるけど織斑先生のオーラに負けて顔を振っちゃった。いや、振らないとダメなんだけど。

休み時間。

「一夏くん」

「ああ、磨美か。久しぶり」

「うん、久しぶりだね」

「おお、アーデルか、久しぶりだな。」

近くからポニーテールの女子がやって来た

「あ、ほーちゃんも久しぶり」

「そのほーちゃんというあだ名はどうにかならないのか…?」

「ならないよん」

「にしてもキャラ変わったな。小学校の時は暗かったのに」

「うん。にしても一夏くんは天然だね、あの分厚いやつを捨てちゃうなんて」

「……はい」

「だからね、一夏くん。私が一夏くんの補習の先生になってあげる  
よ」

「おお！それはありが「まで」「算？」

「どつたの？ほーちゃん」

「一夏には私からISの知識を教えたい」

「ほーちゃん、確か暗記とかそういうの苦手じゃなかったっけ？」

「そ、そこはだな！気合いと根性、愛と勇気で埋める！」

「どこのア パ マンなの……？ほーちゃんはISの練習の相手をやったげて。剣技とかそういうの。ほーちゃんは運動担当。私は座学を担当するから。………これなら平等に一夏くんと一緒にいられるでしょ？」

最後のほうは一夏くんに聞こえないように言った

「………わかってるな、それならいいだろう。」

「交渉成立だね。」

「何がなんだかわからないが二人ともたすか」「ちよつとよろしく  
て?」「はい?」

声が出た方向を向くと、そこには金髪蒼眼の子がいた。

私はこの人の事をよく知っている。

「あ、イギリスの……………」

「あなたには用は無くてよ。磨美・アーデルハイトさん。それより  
訊いてますの?お返事は?」

「あ、ああ訊いてるけど」

一夏くんがそう言ったらその女子はこう言った。

「まあ! なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだ  
けでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんでは  
ないかしら?」

……………うざいなあ。ちよつとだけムカつてきてるんだけど……………  
……………。

「悪いな、俺、君の事知らないし。」

「わたくしを知らない?このセシリア・オルコットを?イギリスの  
代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを?」

「あ、質問いいか?」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って何？」

ズコッ！

うそっ！？代表候補生の意味ぐらいわかんと思ってたのにつ！

「あなた本気でおっしゃってますの！？」

「おう、知らん。」

「い、一夏くん……………言葉から連想して……………」

苦笑いしながら私が言つと一夏くんは頭の上に電球をつかべたような顔になった。

「ああ！俗に言うエリートか！」

「そう！エリートなんですわ！」

セシリアさんはキレる前のペースでそう言ってきた。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡…幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

……………自惚れてるなあ……………その『選ばれた人間』がここにもう一人いるのに。

少し O H A N A S I しなくちゃ

「セシリアさん」

「何でしょう」

「あなたの言う、選ばれた人間はもう一人あなたの目の前にいるんだけど」

「そんな事、わかっていますわ。で現実を理解していただけました？」

「そうか、それはラッキーだ。」

一夏くんが棒読みでそう言った。

「あつ、あなたねえ……大体、あなたはISについてなにも知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。あなただけが唯一男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね。」

「俺になにか期待されても困るんだが……」

「セシリアさん、あなた程の人間ならわかってるはずでしょ、一夏くんは保護と監視、両方の意味合いでここに入学させられてる事が」

「えっ、そうなのか？」

「そうなんだよ、一夏くん」

「っ　人の気に障るようなことばかり…ふん。まあでも？　わた

くしは優秀ですから、あなた達のような人間にも優しく接してあげますわよ」

そう言われて一夏くんは若干不愉快そうな顔になった。

私もそんな顔になってると思うけど。

「まあ、わたくしは入試で教官を倒したエリート中のエリートですから？　ISについて分からないところがあれば、泣いて頼まれたら教えてあげてもよくなってよ？」

「悪いけど、ISについては磨美が教えてくれる事になってるんだ。あともう一つ質問いいか？」

「先ほどの基本中の基本のような質問はお断りですわよ」

「入試ってあれか？IS動かして戦うやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「ああ、それなら俺も倒したぞ、教官」

「私もくって知ってるか。セシリアさんなら」

「わ、私とそこにいるアーデルハイトさんだけと聞きましたか？」

「あなた！あなたも教官に勝ったというの！？」

「うん、まあ、多分」



「多分！？多分ってどういう意味かしら！？」

「まあ落ち着けよ、な？」

「これが落ち着いてられ」

キーンコーンカーンコーン

「タイムアップだ、オルコット」

「っ……！！また後で来ますわ！逃げないことので……よく  
つてー!?」

「さっさと座れ、オルコット。」

「……っ！はい……」

見られちゃった！（前書き）

今回、初めてのムフフなシーン

見られちゃった！

休み時間が終わって二時限目の授業だ

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する　ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

クラス代表かあ……多分、一夏くんが推薦されちゃうんだろうね。

「はい！織斑君を推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

ほらやっぱり。

「では候補者は織斑一夏……他にいないか？自薦、他薦は問わないぞ。」

「お、俺！？」

あ、一夏くんが立ち上がった。

「織斑、席につけ、邪魔だ。さて、他にいないのか？いないなら織斑になるが」

「俺はそんなのやりま　」

「自薦他薦は問わないと言ったはずだ。他薦された者に拒否権はない。選ばれた以上覚悟をしろ」

パンツ！

「待ってください！納得がいきませんわ！」

びっくりしたあ！

いきなり大きな音ださないでよ！

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコツトにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

いいと思うけどなあ……。一夏くんなら。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までISの修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

……！

今、あの女……。何て言った？

一夏くんが極東の猿？

百歩譲って極東っていうのは認めてもいいけど……。一夏くんが猿？

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないこと自体、わたくしにとっては耐えがたい苦痛で」

もうダメ。本気でキレル！

「イギリスだって大したお国自慢無いだろ。世界一不味い料理で何年覇者だ」

「つけあがってんじゃないわよ！古いだけが取り柄のイギリス人！」  
思いつきり怒鳴ってやった。

「あつ、あつ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「先に日本を侮辱したのは貴方でしょ！」

「磨美………！」

「っーーーーー決闘ですわ！アーデルハイトさんも！」

「いいじゃない、のってあげるわ。ね、一夏くんも売られた喧嘩は買う派だよね」

「ああ、それに四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたら奴隷にしますわよ」

「自信もって貴方には負けないって言えるわ」

「そう？何にせよちょうどいいですわ。イギリスの代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわね！」

「こつちも同じよ。貴方みたいに傲慢はこもってないけどね」

「んじゃハンデはどれくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「違う、俺がどれくらいハンデをつければ良いのかっていう意味だ」

その時、クラスの女子から爆笑がおきた。

「お、織斑君それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって大昔の話だよ？」

「織斑君はISを動かせるかもしれないけど、それは言い過ぎだよ」

「うるさいうるさい、黙りなさい！」

私は自分の思っていることを話した。

「今、女性が強いのはISが使えるから、でも一夏くんは今の私達と同じ立場に立っているわ。わかる？」

私がそう言ったらクラスのみんなが笑わなくなった。

「で、でもセシリアさんは代表候補生なんだよ？」

誰かがそう言う。

「なら、ハンデは無し。それで良いよね？一夏くん。」

「あ、ああ、それでいい」

「私もそれでかまいませんわ!」

「貴方には聞いてないわ。あ、織斑先生、私もクラス代表に立候補します」

「わかった、候補者に追加しておこう。まあいろいろと紆余曲折があったが、話はまとまったようだな。織斑とアーデルハイト、オルコットは一週間後の月曜。放課後の第3アリーナで行う。三人とも準備をするように!」

「はい」

キーンコーンカーンコーン!

私が返事をしたと同時にチャイムがなった。

### 一夏 side

俺は放課後、山田先生から自分の部屋の鍵を受け取り、その部屋の前にいた。

「とりあえず、部屋に入ろう……」

俺は鍵をドアに差し込み

って開いてんじゃん

そのまま俺は部屋の中に入り、さっそくベッドに潜り込んだ

「やわらけえ〜！絶対高いやつだこれ！」

「だれかいるの？」

なんか独特の曇りがある声が聞こえたぞ……！

「あ、同室の人ね。これから一年間よろしく、私は」

「磨美」

一夏 side out

磨美 side

「あ、一夏くん……」

私がパンツをはいてシャワールームから出るとそこには一夏くんがいた

「よ、よ……」

「いやあっ……」

いきなりの事で体が反射反応を示した

私は無意識の内に右目を両手で隠してしまった



ハラリ……………

さて、考えてください読者のみなさま。

私はさっきまでバスタオルを両手で押さえていました。

だけど今、その両手は右目を隠すのに使っている。

それが意味するものは……………

今の私はパンツ一丁で初恋の人の目の前に立っている

という事になる

「……………! ……いやぁん!」

あ、今気がついた!

そもそも私がオッドアイって事は一夏くんは知ってる……………!

ああああああ!なんて馬鹿な事を                    ん?

まてよ?今、私はほぼ裸……………一夏くんはベッドの上で……………

この時、私の中のなにかが暴走を開始した

「……………」

無言で私はドアに向かい、鍵を閉めた

そして、一夏くんの上に覆い被さるようにベッドに乗った

「……………お、おいアーデル？」

「一夏くん……………！」

そして自分の胸を一夏くんの制服越しの胸板に押し付けた

「あつ……………はああ……………！」

熱いため息を一夏くんの顔にかけて、胸を一夏くんの制服に擦りつける

「ちょ、アーデル！ここは学生寮だ！それに、そんなことをここで始めたら千冬姉が……………！」

「……………そんなの……………知ったことじゃないから……………！」

「アーデル……………！」

「ひうつ……………！」

突然、一夏くんが怒気のコもった声を出した

「……………いいかげんにやめてくれ……………。今の俺にはアーデルと……………  
…………………………」

「私…………………………？」

「よ、よ、よ、夜の営みをやる精神力が残ってないんだ……それに……」

「……………それに?」

「……………やっぱり今は言わないでおく」

「……………ごめんなさい。……………怒った?」

私は「夏くんに上目遣いでそう言った

「……………う……………怒ってはないけど、今度から気を付けてくれよ?」

「……………?」

「……………私のES学園のはじめの一日は終わった

見られちゃった！（後書き）

……そのうち、アーデルは大変な事を起こしますね。こんなのだっ  
たら……

## 決戦の日（前書き）

短いです。駄文です。その点だけを留意して読んでください

## 決戦の日

何だかんだで時は過ぎてクラス代表決定戦の日がやって来た

一夏くんには私からとことんまでISの知識を叩き込んであげた。

無論、BT兵器の弱点も一緒に教えた。

そのおかげか今、一夏くんはファーストシフトもしてないISでオルコットさん相手にやや優勢で戦っている

「……………凄いな……………あの短期間であそこまで強くなるとは……………」

隣で篠ノ乃さんがそう言った。

実を言うと私も一夏くんがあんな短い間でここまで強くなれるとは思っていなかった。

私の予測だと一夏くんはせいぜい頑張つて代表候補生になり損ねた人ぐらいは強くなれると思っていたんだけど、もしかしたら一夏くんは代表候補生並みに強くなっているかもしれない

「……………ちょっと……………本気で戦わないと駄目かもしれないなあ……………」

若干一夏くんをみくびっていた私が恥ずかしい。

……………それよりも気になることが一つ。

さっきから篠ノ乃さんがディスプレイを心配そうな目で見ているの

だ。

その目は好きな人を見つめているような感じで

「……篠ノ乃さん、ひとつ聞いていい？」

「……なんだ」

「さっきから一夏くんを心配そうな目で見てるけど……一夏くんの事、どう思ってるの」

「……好きだが？それがどうした」

ワオ、あっさりと認めちゃったよ……

「それは友達として？それとも……」

「両方だ」

私の言葉を遮って、篠ノ乃さんはそう言った。

……両方ね。大胆かつ、正確な答えだなあ。

「……大胆だね。篠ノ乃さんらしいし」

「ふん、お前はどつなんだ。アーデル」

「私？私は一夏くんの事、好きだよ。恋愛対象として……ね」

何度も言うけど私は一夏くんの事を愛してる。

だから、一夏くんを独占したい。

そして一夏くんを私の手で無茶苦茶に（性的な意味で）したい

私の心を一夏くんが独占するように、一夏くんの心を私だけで埋め  
尽くしたい。

……強欲だ。強欲だけど……それほどまでに私は一夏くんを欲して  
いる。

「アーデル、おいアーデル！」突然、声をかけられた



「ひゃああああ！びっくりしたあ！一夏くんなんているの！」

「勝ったからだ。磨美の知識と筭の特訓が役に立ったよ。ありがとう  
な二人とも」

「……………うん。どういたしまして」

「凄い……………！一夏くんは初期状態のISで戦って、代表候補生に勝っ  
たんだ……………！」

「なら……………本気で戦わないと負けるね。確実に……………」

「一夏くん」

「ん、なんだ？」

「次、本気で戦わせてもらっね。調子に乗ってたら、負かすよ」

「わかってるよ」

「一夏くんはそれだけ言って、織斑先生の所へ行った」

「さて、次は私の番だ」

「自惚れてたセシリアさんとは違っってこと、見せつけあげたいな。」

代表候補生の本気(前書き)

指摘があったので修正しました

## 代表候補生の本気

「行くよ、ネーブ・テンペスタ」

私がそう言った時、私の体にISの装甲が展開される

背中の翼型のスラスタが私のISの最大の特徴。

「……よし、各機能オールグリーン、スラスタにも異常はなし……行くわよ、ネーブ・テンペスタ！」

私はカタパルトハッチからアリーナへ飛び出して行った

そして、そこで待ってたのは専用ISの白式を展開した一夏くん。

「先に来てたんだ」

「ああ、千冬姉に言われてな」

そう言った後、一夏くんは私から視線を反らす

理由はわかってる。

原因は私のISスーツだ

私のISスーツはビキニタイプでかなり露出が高い。

それに追いうちをかけるように私のISスーツはサイズが私の体より小さくて、少し胸が露出している

おまけに言うと今は装甲で隠れててわからないけど、下半身はＴバツクになっててお尻がほぼ丸出しに近いのだ。

ま、一夏くんの視線を釘付けにする事ができるならいいんだけどね

「一夏くん、いくら私がエッチいからって勝負に集中しないのはダメだゾ」

プライベートチャンネルで一夏くんにそう言う

「あ、ああ。わかってる」

一夏くんは若干赤面しながらそう返事をした

「さ、始めましょ。自惚れてない代表候補生の实力を見せてあげる」

「ああ」

一夏くんの目が戦士のものに変わる

それを見計らって私はこう言った

「磨美・アーデルハイト、ネーブ・テンペスタ、やりますっ!」

試合開始のブザーが鳴り響いた

「行くわよ一夏くん!」

「来い!アーデル!」

私は右手にビームデスサイズを展開して、一夏くんに突っ込んでいった。

一夏くんは実体剣を展開して私のデスサイズを止める。

刀と鎌は火花を散らしながらお互いの動きを止めあっている

私がデスサイズを押しても一夏くんは全く動かず、私は精神的に攻める作戦にでた

「すごいね一夏くん、ますます愛したくなっちゃうよ」

体を少し揺さぶり、自分の体を武器にして一夏くんをせめる

「ちよっ！アードル!？」

体を揺さぶるとそれにつられて私の胸も揺れる

一夏くんだって男の子なんだ、たぶん胸を揺さぶるだけで結構いろいろと削がれるだろう

案の定、一夏くんは赤面し刀を持つ力が弱くなる

「隙あり!」

「のわっ!」

私はデスサイズで一夏くんのISを斬りつけていく。

「真の戦士になりたかったら、頭の中から煩惱を消し去って何も考えずに戦うこと！いい！？」

そして距離を取って、腕にミサイルコンテナを展開、そこから大量のミサイルを放った

「一夏あ！」

織斑千冬の隣で箒が叫ぶ。

「ふん」

それにもかかわらず、織斑千冬は呆れたような顔でこう言った

「機体に救われたな。馬鹿者め」

「終わったかな？おい、一夏くん？」

私は少しふざけたノリで一夏くんにそう言った

すると返ってきたのは

「まだまだ！まだ終わらねえよ！」

という声

「……………！」

煙が晴れるとそこには形を変えたISを装着した一夏くんがいた。

「……………ファーストシフト……………したの？」

私は一夏くんにそう訪ねると一夏くんはこう言った

「さあ。ただ、この機体がやっと俺専用になった」

やっぱり……………ファーストシフトをしたんだ。

土壇場のピンチでファーストシフトするなんて一夏くんは運がいいな。

私はミサイルコンテナを腕から外し、ビームデスサイズを持った

「一夏くん、このISと私の本気をみせるから、一夏くんも本気を  
見せて」

「……………ああ、わかった」

「……………ありがとう、……………アルティメットモード起動開始……………  
……………っ！」

私の意識に一気に情報が流し込まれる

それはまさに情報の濁流と言つべきだ

ハイパーセンサーにカウントダウンが表示される

それはシステムの発動時間と私の体が持つ限界時間を意味している

「いくよ一夏くんっ！」

「ああっ！」

私は一夏くんに急加速して行っただ。

一夏くんも同じように私に向かってきた

一夏side

俺は雪片を構え、磨美のもとに一気に加速した

「ぜえりゃああああ！」

そして、磨美に向かって雪片を振り抜き磨美のISを斬りつけた

はずだった

「えっ……」



「……一夏くん、私言っただでしょ？私は本気だっつて」

一夏 side out

磨美 side

「えっ……」

刀を振り抜いた一夏くんは目の前にいたはずの私がいきなり消えた事に驚いていた

「……一夏くん、私言っただでしょ？私は本気だっつて」

私は一夏くんの後ろから声をかけた

「っ！？」

「終わりだよ、一夏くん」

私はデスサイズを一夏くんの肩に引っかけ、そして切り裂いた

ビイイイイイ！

『試合終了！勝者、磨美・アーデルハイト！』

その時、ハイパーセンサーのカウンタダウンがゼロになった

「っ……」

急に力が入らなくなって私は一夏くんの肩を掴んだ

「……?どうした?」

「ううん……ちょっと疲れただけ」

そのあと私はハッチに戻り、すぐに自分の部屋に向かい、ISSー  
ツのまま寝た。

## アルティメットモードの詳細(前書き)

要望があったので詳細を載せました

## アルティメットモードの詳細

### アルティメットモード

ネーブ・テンペスタに搭載されている特殊機能。

一時的に機体性能と操縦者の身体機能を極限まで上げるシステム。

ただし制限時間が1分でも短いいため短期決戦用の切札になっている。

このシステムを50%以上の力で使用すると、ネーブ・テンペスタのウィングスラスタから余剰エネルギーで作られたエネルギーの羽が出てくる。

このシステムを使用する際、操縦者の体になりに負担がかかるため、磨美は本気になったときしか使用しない

システムを稼働させたあとかかる負担はシステムの稼働率に比例し、

10%では立ちくらみと強い疲労を感じる程度

20%では少し頭痛が激しくなる

30%では吐き気に襲われる

40%では体に力が入らなくなる

50%では意識を保つのがやっとになる

60%では3日間ISを起動させられなくなる

70%では吐血、さらに5日間ISを起動させられなくなる

80%になると意識がまともを保てなくなり歩くことが難しくなる

90%では歩くことは愚か、立つことも不可能になり、1週間の療養を必要とする

フルパワー、100%で稼働させると意識を失い、3週間の間、昏睡状態に陥ってしまう

このように操縦者に多大な負担がかかり下手をすれば命さえ失いかねないため、現在IS委員会で使用禁止にするかどうか会議中である

## アルティメットモードの詳細（後書き）

……相当危険なプログラムなので使用する機会は少ないです

最後の最後に不幸がついてきたあ！（前書き）

最後に磨美が絶望します

最後の最後に不幸がついてきたあ！

クラス代表決定戦の次の日、今は朝のSHR中だ。

「では、一年一組代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がりでない感じですね！」

「先生。ちょっと質問いいですか？」

「はい、織斑くん」

「何で俺なんですか？そもそも昨日、俺は磨美に負けてるし」

「それはですね、ええと」

「ごめんね一夏くん、実は昨日から頭が痛くて。健康状態が万全じゃないとクラス代表は認められないって織斑先生に言われちゃったから」

私の説明で一夏くんは納得したみたいだったけど、実の所はただ、めんどくさいから一夏くんに押し付けただけなのだ

だけど、頭が痛くて織斑先生に報告したのは本当だ。

「という訳なんです、わかりましたか？織斑君？」

山田先生、私のセリフを説明代わりに使わないでほしいよ

「はい、さっきの磨美の説明で十分理解しましたから」



「それならよかったです、はい！」

そんなこんなで朝のSHRは終了した

「それではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。ア  
ーデルハイト、織斑、オルコット。試しに飛んでみせろ」

「はい……おいで、ネーブ・テンペスタ」

私は指にはめている赤いクリスタルがはめ込まれた指輪から自分の  
ISを呼び出す

隣でセシリアさんはISを展開を展開し終え、先に待っていた

その後、一夏くんも白式を展開し終えた

「よし、飛べ」

織斑先生の言葉を合図に、私は一気に飛翔する

その後一夏くんがかなりノロノロした速度で私とセシリアさんの所  
に向かってきた

「何をやっている。ブルー・ティアーズとネーブ・テンペスタと白

式では、スペックは白式のほうが上だぞ」

うん、織斑先生の厳しさはいつも通りだね

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分にあつた方法を探すのが建設的ですよ」

むむっ……、セシリアさんの一夏くんに対する視線がなんだか熱っぽい……これは負けられないぞ

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体あやふやなんだよ。何で浮いてるんだ、これ」

「説明しても構いませんが、長いですわよ？ 反重力力翼と流動波干涉の話になりますもの」

「わかった。説明はしてくれなくていい」

「一夏くん、後でちゃんと教えてあげるからね」

「いや、ホントにいいって」

「遠慮しないでいいよ……ね？一夏くん？」

「……っ……！」

最後の方は一夏くんにギリギリまで近づいて耳打ちした

その時にかかる私の息に一夏くんは反応して身震いをする

『一夏！いつまでそんなところにいる！速く降りてこい！』

「アーデルハイト、織斑、オルコット、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地上から十センチだ」

「了解です。では、お先に」

まずセシリアさんが降下して完全停止を成功させるけど危なっかしいなあ……

「じゃ、次は私が行くね」

私は一気に地面に向かって加速して……って怖いっ！

私は無意識に足を前に持つてきて、停止した……と思う

「きゃんっ！やっぱり怖いっ！」

「……9、99？、及第点だ。合格としよう」

「……へ？」

なんかわかんないけど私、褒められてる？

「あ、ありがとうございます……？？」

私がそう言った後、織斑先生は一夏くんに降下の指示をだした

それに従って一夏くんは一気に降下して

ズガアアアン！

見事に墜落し、クレーターを作り上げた

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を空けて  
どうする」

「……すみません」

うわあ………大きなクレーターを作っちゃったね………

まあ、私は埋めるのを手伝わないけどね。その方が一夏くんにもいいと思うし。

授業が終わった後、私はさっさとグラウンドから立ち去った。

その時一夏くんの助けを求める視線を感じたような感じなかったよ  
うな………ま、どっちでもいいか！

### 次の日

朝………私はこの世に絶望した。

今朝、本国のIS開発局からメールがきて、内容は

『新しい、IS、武装、できた、だから、取りに、来い。イタリ  
AIS開発局局长 エミリア・アズナブル』

くそっつ！あの変人めっ！

某 い彗星みたいな仮面しやがって！

名字が一緒だからってふざけやがって！

「…………織斑先生に伝えないと…………無断欠席は死刑に処されるわ…………」

私は織斑先生に長期欠席をする事を伝えた後、絶望しながら空港に向かった。

## イタリアにて（前書き）

帰るといふフレーズがすごく使われています。







「どっちでもいいっ！」

「……と話が横道に逸れてしまったが、解説をするぞ。まずこの装備は

(ネタバレになるので割愛)

……という訳だ。理解できたかな？」

「……………( . . . ) z z z」

「寝るなっ!」

「んあ……?おわった?じゃあ帰るね」

「まてい!こなたは話を聞いていないではないか!」

「うるさい!私は一夏くんのもとへ帰りたいのっ!」

そんな感じでこのやりとりが三回つづいた

そして、日本に戻ってこれたのは日本時間で午前6時だった……あ  
ー疲れた。

中国からの刺客！？ってあなたは！（前書き）

ポツタイトル

中国からの刺客！？ってあなたは！

では本編をどうぞ

中国からの刺客！？ってあんたは！

「……………あー……………時差ボケで眠い……………」

うん……………眠い、飛行機に乗ってる間寝てたしおまけに夢まで見てたし。

どんな夢かと言つとツインテールの女の子が男の子に料理が上手くなつたら酢豚を毎日食べさせてあげるって言つてた。

多分あの言葉は遠回しに言った「結婚して」だと思つ

もし、あれが一夏くと他の誰かだとしたら……………

「……………違う違う！一夏くんは私が独占するんだから……………！絶対に……………」

そう私に言いつけるけど、なんか……………モヤモヤする……………

私はそんな感じでモヤモヤしながらIS学園に戻つた

あー……………今日が土曜日でよかった

平日だったら授業に集中できなくて織斑先生に叩かれるし。

どのみち途中で眠くなって寝ちゃつてそのままあの世に送られるし。もちろん織斑先生の手によつてね

さーて、帰つたら一夏くんを弄くり回そうかな……………色んな意味で



昨日、本気で一夏くんを襲った。

もちろん一夏くんは抵抗してもがいてた。

その時はバンバンと一夏くんが壁を叩いててそれにしびれを切らした隣の部屋の人……ていうかほーちゃん（篤）がやってきて3分の2殺しにさせられた。一夏くんと一緒に。

……仕方ないや。今度本気で一夏くんを襲うときは一夏くんが私を好きでいてくれるときにしよう。

そしたら、一夏くんも抵抗しなくなると思うし。

……ドストレートに凄い事を言っちゃってるけど大丈夫かな？この小説。

？ この小説ってなに？

さて、今日も一日頑張るぞおっ

……ごめんなさい、ぶりっ子みたいに言ってみただけです。  
はい……ホントにスイマセン

「ねーねーおりむ、まーみん」

あう、この呼び方は絶対布仏さんだ……

あの娘マイペース過ぎて会話が成り立たないから友達としてあんまり好きなタイプじゃないんだよね。

ま、嫌いっていう訳でもないけどね

「どつたの？布仏さん」

「転校生の噂きいた〜？ なんでも〜中国の代表候補生らしいよお？」

なんでギモン形？ ま、いいけど

………そういえば代表候補生といえはもう一人………

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

やっぱり出てきたセシリア・オルコットさん

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？ 騒ぐことのもんでもあるまい」

おお、ナイスだよ、ほーちゃん………ってそっぽ向かれちゃった………。

………怒ってるのかな。私が一夏くんを襲った事に

………謝りたいけど、ほーちゃんが許してくれるか心配だな………。

「磨美の言う通り確かにどんなやつなんだろうな」

「む、……気になるのか？」

「ん？、そりゃもちろん」

「ふん」

……あらら？

ほーちゃんは不機嫌になっちゃったみたいだね

……それにしても新装備、説明書きを読んだけど若干チートだったよ。どのくらいかと言うと……織斑先生に金棒と対戦車ライフル、おまけに名刀村雨を持たせたみたいな感じ。

……若干盛ったけど気にしないでね。

「織斑くん、がんばってねー」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持つてくるクラスは一組と四組だけだから、余裕だよ」

やいのやいのと賑やかだけどISの性能差が勝敗を決めるわけじゃないんだけどなあ

あ、これ赤い技術者が言ってたことなんだな。

「その情報、古いよ」

……！



少しびつくりしちゃった……！

私が後ろを向くとそこにはツインテールの色んな意味でちっちゃい女子が一人

……！思い出した！この人は……

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できない」「鈴ちゃー……ん！」「うぎゃあっ！」

気がついた時には私はその女子に飛び付いて押し倒していた。

ガールズラブ？ ナニソレ？ オイシイノ？

私はGLには興味がなから一応言っておこう

「いたた………肩甲骨の辺りが………」

「大丈夫？鈴ちゃん？」

「ケホツ、ケホツ………え？あ………もしかして、磨美？」

「その通り！」

某クイズ番組の初代司会者っぽく言ってみました

「鈴？………お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生。ファン・リンイン鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわ

け……っ……っていつまで乗っかってんのよ！同性愛者に勘違いされるで  
しょうがぁー！私はそれだけは嫌じゃあぁぁぁー！」

鈴ちゃんの叫びは織斑先生が来るまで終わることはなかった

イタリアのシュールな光景と嵐の予感（前書き）

今回は強烈なインパクトの奴が三人一気に出てきますよ！

ヒント、クローン 記憶喪失 侍 ガンダム

わかる人はわかりますよね？

## イタリアのシュールな光景と嵐の予感

にゃー……

ごめんなさい。言ってみただけです。

絶対今浮いてるなあ。うん……恥ずかしい。

さて、今の状況を説明しよう

今の状況は食堂で食事中

一夏くんが鈴ちゃんの事を知らないほーちゃんとオルコつち（勝手に私がつけた。ちなみに まごつち風）に説明中だ

私は鈴ちゃんの事をよく知ってるし説明は聞かなくてもわかっている。

「という訳だ。わかったか二人とも」

あ、説明が終わったみたいだね

「二人とも器が小さいんだから、一夏くんの幼なじみぐらい素直に歓迎してあげなよ」

そう言ったらほーちゃんとオルコつちに凄く睨まれた。……あー怖い怖い、くわばらくわばら。

「ねえねえ、鈴ちゃん。いつここに来たの？昨日？一昨日？3日前？それとも4日前？はたまたま」

「5日前って聞くんでしょ？アーデルん。」

「あは、わかつちゃうよね。ていうかパターンでわかるよね」

実はこれ、小学校の時に鈴ちゃんと考えた言葉遊び。

始めのうちは楽しくてはまってたけど後から両者が物凄い勢いで飽きて以後この遊びで遊ぶことはあんまりなかったのだ

「それにしてもびっくりしたわよ。あんた何で男なのにIS動かしちゃってんの。おまけにアーデルんも居るしさ」

あ……私はおまけなんだ。

しばらくおまけの私は椅子の上で体育座りして膝の匂いでも嗅いどこう。

うん、我ながらいい匂いだ。おまけだけど

とはいってもーブリーズを塗ったからおまけの私から石鹸みたいな匂いがするだけなんだけど。

ああ……おまけの私は「さっきから心の中でおまけおまけうるさい！」

「うわあ、鈴ちゃん読心術を会得したんだ」

「え、ああ、そうね！この私にかかれば読心術なんて朝飯前よ！」

その後やんややんやと話し込んでたら昼休みが終わるギリギリになつてて急いでご飯を食べて喉に詰まらせたのは余談だ。

ちなみにその時、天国の扉が一瞬だけ見えた

場所はかわつてここは第3アリーナだ

一夏くんもISの知識について大体理解出来てきたみたいだったし座学の授業はおしまいにしてISの操縦のレベルアップを目的とした特訓をしていた。

だけど……ほーちゃんとオルコツちは一夏くんにひどかったなあ。

2対1で一夏くんを攻撃してフルボッコ。

なにも知らない人が見たらただのリンチにしか見えないよ

ちなみに私はISを展開してなくて、一夏くんのデータ、ついでにセシリアさん及びブルー・ティアーズのデータを取ってた。

評価をすると一夏くんの場合はISの操作が格段に上達している

ただ、単一仕様能力の零落白夜を多用しすぎて自爆する事が多い。

セシリアさんの方は流石代表候補生といたいけどビットの操作の時に止まってしまうのがいけない。

平列思考（一度に複数の物事を考えること）が出来ればビットは一對多で圧倒的な戦力になるだろうなあ。

……あーそういえば新装備もビットがあつたなあ。

実はビットはあの仮面の技術者が自作して稼働させたら大成功したからあの技術者が私のISに搭載してくれたのだ。

こう考えるとあの人はISを作った篠ノ之束からコアを作る技術だけを抜いた天才なのかもしれない。

その頃イタリアでは

「……！誰かが私を尊敬しているようだな……」

噂の仮面の技術者がなんの根拠もない事を言っていた

「相変わらず化け物染みた勘が発揮されているな。エミリオ・アズナブル」

「どうせ子猫ちゃんの新装備を思い付いたんだろう？」

「好意を抱きますよ……貴方のその勘に。あ、ツモ」

「なっ！こやつ牌回しは化け物か！？」

「これは結果だよ…だから知る！自ら育てた敗北の食人植物に喰われて、敗者は滅ぶとな！」

「そろそろ限界か、牌が悪かったかな？あとアル、そんなんじゃ滅ばないから。そもそも食人植物つてなんだ」

イタリアでは仮面の男達四人が雀卓を囲んでいるという何ともシュールな光景が広がっていた

ちなみにこの麻雀の際に赤い技術者がつけた名前は

「仮面舞踏会ならぬ仮面麻雀大会」

だった

IS学園、一夏と磨美の部屋にて

「という訳、だから部屋替わって」

「うん、お断り」

即答だった



## イタリアのシュールな光景と嵐の予感（後書き）

はい。ノリで出しました。

今現在名前が決まっているのはクルーゼがモデルの奴です

ネオがモデルの奴はクルーゼがモデルの奴にツッコミをいれる役割  
ですね

ブシドーは……まあ赤い技術者の同僚です

約束を勘違いされていた時ほど悲しいことはない。(前書き)

かなり短いですが、すみません

約束を勘違いされていた時ほど悲しいことはない。

「という訳、だから部屋替わって？」

「うん、お断り」

「即答っ!？」

だって大好きな一夏くんと同じ部屋なんだもん。そう簡単に部屋は譲れないよ。そもそも譲る気なんてさらさら無いし。

「用件は済んだ？」

「済んでないわよ!」

こんなのじゃ鈴ちゃんは引き下がらないのは知ってるけど、私はまだ一夏くと離れたくない。

他の女に寝取られるのなんか持っただけだ

「そもそもなんで一夏くんの部屋に住みたいの? もしかして一夏くんに【検閲削除】されて、【検閲削除】したいのかなあ?」

その言葉に私以外の全員が赤面する

「と、ところでさあ、一夏」

「な、なんだ? 鈴?」

あ、二人とも話をかえた。

「約束、覚えてる？」

「えーと、あれか？鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を

「そ、そうっ。それ！」

「おごってくれるってやつか？」

……………バカだ。

一夏くんをバカにしたくないけど、こればかりは救いようがない。

ましてや一夏くんは自分の記憶力に関心してる。

あーあ、どうなっても知ーらなーいよーだ

「シャワー浴びよっ……………」

私がシャワールームに入って、蛇口を捻ると同時に凄く怒ってる鈴ちゃんの声が聞こえた。

アーメン、哀れな一夏くんに神々の救済を。

「……………唐変木なんだから」

今思つと、一夏くんは私の好意に気づいてるのかどうか心配だ

こうなったら……………実力行使！

するわけないじゃん。

今は気分が乗らないし、もし鈴ちゃんが帰ってきたら半殺しじゃ済まないと思うし、下手したら一夏くんと一緒にあの世送りだし。

さてと、シャワータイムはこれまでにして、寝よう。

一夏くんなんてだいつ嫌い！

一夏くと鈴ちゃんの喧嘩から3日経った。

あれから鈴ちゃんは一夏くんを拒絶しつ放しで露骨に私は不機嫌ですオーラを振り撒いている。

おまけに何故か私にまで火の粉が降りかかってきて、私まで無視される始末。

……やっぱり無視されるのは辛いなあ。

小学校の頃はとことんまで無視されてたから慣れてたつもりだったけど……。

おまけに無視してるのが一番の友達だから余計に辛い。

「……………」

無言で髪の毛を弄くりながら、私は一夏くと鈴ちゃんが仲直り出来る方法を考えていた。

「I have no idea how to reconcile. So do not disturb. ではアーデルハイトさん。この英文を和訳してください」

「……………私は仲直りの方法を考えている。だから邪魔をしないで」

あ……………！しまった！

授業中だつてこと忘れてた！

「おー正解！」

「おー！」

え？　なんかミラクル起こしちゃった？

あんまり状況を飲み込めていない私を何故か皆は関心していた

「なんかミラクル起こしちゃった……」

後々ほーちゃんから聞いたんだけど上の空で授業に集中していないように見えた私に先生が問題を出したらしい

まさに奇跡だ。

ま、奇跡は連続して起きるものじゃないから奇跡っていうんだけどね

「……！新装備のテストしなくっちゃ……！」

私は放課後、急いで第3アリーナに向かった。

「ネーブ・テンペスタ、行くよ」

私はネーブ・テンペスタを展開した。

だけどその姿は一夏くと戦ったときのものじゃない

腰部のビーム砲を撤廃し、そこに蒼いライフルビットが連なるようにしている。

おまけに腹部にはプラズマ集束砲が追加されていて、肩部にはビームキャノンが設置されている

これは火力を重視した追加装備であの赤い技術者はこれを『アーメリア』と言っていた

火力を重視しておきながら機動性がフランスのリヴァイヴとほぼ同じなんだからチートって言ったらチートだ

「試しに撃ってみよう……」

ターゲットを表示させ、それをビームキャノンで跡形もなく破壊し、そこには黒焦げになった地面が残っていた。

自分で撃っておきながら啞然としてしまった。

おまけにターゲット発生装置も壊れる始末

「あー……キャノンにリミッターをかけなきゃ。こんなの絶対防御を貫通しかねないや……」

絶対防御を貫通しなくてもビームから放たれる熱線で火傷をしてしまっ



なんて装備を開発してくれたんだ、赤い技術者！

「あゝゝゝ憂さ晴らしにターゲットをぶっ壊しまくろうかしらん」

聞き覚えのある声が聞こえた。

「……あ、アーデルン」

3日ぶりにその呼び方で呼んでくれた！ ヒヤッホーイ！

「や、鈴ちゃん。なにしに来たの？」

「ちよつとストレス発散にね」

「ターゲットならさっき私が発生装置ごと壊しちゃったから出ないよ？」

凄いことをさらりと言っちゃった

「え……」

ああっ！鈴ちゃんが落ち込んでる！ 相当ストレスがたまっていたんだ！

「その代わりと言っちゃアレだけど私と模擬戦しない？鈴ちゃん」

「今はいいわよ。それに、トーナメントもあるし安々と秘密兵器を見せびらかすわけにはいかないじゃん」

「それもそうだね」

そんな感じで雑談をしてたら（途中で胸を無茶苦茶揉まれたけど）一夏くん達がやって来た。

「あ、一夏くん」

「待ってたわよ一夏！」

待ってないでしょうが。鈴ちゃん。私と話し込んでたでしょうが。私の胸、揉みまくってたでしょうが。

「貴様！どうやってここに！」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ！」

「関係？はんつ、あたしは一夏の関係者よ、だから問題ナシね」

「な……何ですって!？」

うわうわうわうわあ……

厄介な感じになってきたよお

「ほほう……どういう関係か詳しく聞かせて貰おうか」

「盗人猛々しいとはまさにこの事ですわね……!」

「……今は私が主役なの、脇役はすっ込んでてよ」

「脇役……」ですつてえ!?!」

カチンと来てるほーちゃんとオルコツちをほったらかして鈴ちゃんは一夏くんの方を向いた

「で……一夏。反省した?」

「は?」

「だ・か・ら!怒らせて申し訳ないとか、仲直りしようとか!色々あるでしょ!」

「いや……そう言われても、お前ずつと俺を避けてただろ。こつちは何やらサツパリ……」

「は?じゃあ何?女の子が放っておいてって言ったら何もせずに放っておくわけ?」

「そりゃ普通そつとしてくだろ。それが何か変か?」

「変つてあんたねえ……」

……一夏くんの考え方はどこかずれているなあ

「いいからとにかく謝りなさいよ!」

「何でだよ!ちゃんと約束覚えてたじゃねえか!馬鹿!」

「馬鹿とは何よ!この朴念仁!間抜け!アホ!」

「うるさい、貧乳！」

「あっ！一夏くん言っちゃダメ！」

って言った後に言っても無駄だ！

私は一夏ちゃんと鈴ちゃんの間割り込み

ガスッ！

刹那、私のお腹に激痛が走った。

「あ………」

「うっ……ゲホッゲホッ……！！……痛……！！」

口の中が鉄の臭いで充満する。

「……ごめんね、アーデルん。」

……そう言われても逆にムカつくだけ。

私は思いっきり鈴ちゃんの右ほほを叩いた

「鈴ちゃんの馬鹿っ！ISを展開してない人に向かってISで殴りかからないでよ！殺人者になりたいの！？」

「………」

「一夏くんも一夏くんだよっ！鈴ちゃんが一番気にしてることを売り言葉に買い言葉とはいえ言っちゃうなんてっ！さいつてい！そんな一夏くんなんてだいつ嫌い！」

「アーデルハイトさん……………」

「はぁーっはぁーっはぁーっはぁーっ……………」

言っちゃった……………！

初めて一夏くんの事を侮辱しちゃった……………！

「……………！」

私はその場から逃げ出した。

今までに味わったことのないぐらいの絶望を味わいながら

一夏くんなんてだいつ嫌い！（後書き）

次回、生徒会長、登場

にしても一夏に対してアーデルが明確な拒絶？を示しましたね

絶望の淵で（前書き）

何も言つことないんで……どぞ

## 絶望の淵で

「……………」

私はただ走っていた

ただ、ただ、走っていた

さつき一夏くんに言っちゃった言葉をなかつた事にしなくて走り続けていた。

「……………」

なんであんな事を言っちゃったんだろう

私は一夏くんの事が本当に大好きなはずなのに…なんで…!

「……………」

私は走ることを止めた。

疲れたし……

こんなことをしたってどうせ何にも変わらないんだから

あ……「どうせ」は禁句にしたのに……

ああ……なんて惨めなんだろう。



「ひっぐ……うわあ、あ、あ、っ、あ、あ、あ……！」  
嗚咽が混じった鳴き声を出して大泣きした。

泣いて、泣いて、泣いて

泣きまくった

洗い流せもしない過去の事をどうしても洗い流したくて泣きまくった。

「どうしたの？」

「ふえ……？」

突然、後ろから声をかけられた

「女の子が泣いてたらせっかくの綺麗な顔が台無しだぞ。ほらこれで拭いたら？」

そこに立っていたのは水色の髪の二年生（ネクタイが黄色だからわかる）だった

その二年生は私にハンカチを差し出してきてくれた

「あ……ありがとうございます……」

「……なにかあったのかな？おねーさんが相談にのってあげるわよ」

「別に……大丈夫ですから……」

「うそおっしやい。鼻水垂らしてまで泣いてるくせに」

あ……この人には嘘は通用しないんだ。

「……」

「んー、黙ってちゃわからないなあ……なんならおねーさんが当て  
ちやうぞ?」

……当たるわけないのに何いつてるんだろこの人……

「今当たるわけないって思ったでしょ」

「……!」

心を読まれた!?

読心術を使えるのは織斑先生だけで十分だよっ!

「びっくりしたでしょ? こう見えても読心術はマスターしてるの  
よ」

「は、はあ……」

「で、あなた、なんで泣いてたの?」

「あ……う……」

「……私はあなたじゃないからわからないけど、あなたが自分が悪い  
と思うているのなら謝るべきよ」

……私が悪い……？

あ……最後の一言は余計だったかな……

「……」

「にしてもあなた、胸おつきいわね。私より確実に大きいわ」

「えっ……あ……おつきすぎるので邪魔にしかありませんけど  
……」

「ええい、そのおっぱいを揉ませなさい！」

むぎゅっ！

「えっ！？ ちょっ！？ あっ……！ らめええええ！」

「ここから先は読者の皆様のご想像にお任せします

「……ふえ……」

「なんとも絶妙な柔らかさね。彼氏が出来たら真っ先に揉んでもら  
つたら？」

「かつ、彼氏だなんて……！」

ああ~~~~~！

彼氏って言われて真っ先に一夏くんの顔が出てきちゃったよお〜  
~~~~~！

「ふふ、赤くなっちゃって。あ……もうこんな時間だ、生徒会室に行かなきゃ……虚ちゃんに怒られちゃう」

「……あ、あの」

「んむ？なんじゃらほい？」

「相談に乗ってもらってありがとうございます……」

「いっていいって！人として当然の事をしたまでよ！じゃあね！  
磨美・アーデルハイトちゃん」

「はい……！」

なんか凄い人だなあ……

あれ……？

最後にあの人、私の名前をフルネームで言ってたけど……私名前  
言っただけ？

言っていない筈だよな？

じゃあ……なんで？

「なんで私の名前を知ってたんだろっ……」

……ホントに謎だ。ま……謎は考えると深くなりすぎるからこれは  
おいておこう。

仲直りからの……！

夜……

私は一夏さんと仲直りというか謝るために部屋の中で一夏さんを待っていた。

ガチャ……

「……あ」

「……おかえり、一夏さん」

「あ、ああ………」

うっ……いざとなったら謝る勇気が出てこない……

だめじゃない！私！

そんなへたれで良いのか！私！言い訳ないでしょ！

自分で自分を励まし、私は一夏さんに話しかけた

「……一夏さん………」

「なんだ？」

「さっきの事なんだけど………ごめんね」

「さっきの事？……ああ、アリーナの………」

「本当にごめんね………」

「わかってるって、それにアーデルが本心であんな事を言うとは思えねえし」

「え………？」

「だってアーデルお前ってさ小学校の時から悪口を言わないじゃねえか。自分が悪口を言われた人は凄くイヤな気持ちになるって言うてさ」

あ……。

そういえば私って悪口をいった記憶があんまりない………

一夏くんは私の事を細かく理解してるんだ。

「じゃ、じゃあ………許してくれるの？」

「おう、当然だろ？」

「ありがとう………！一夏くん！」

私は反射的に一夏くんを抱きついた

「一夏くん………ありがとう」

余りの嬉しさに同じ事を二回も言っちゃった

「お、おう。どういたしましてが……退いてくれない」「ヤダ今日は一夏くんと一緒に寝るもん」「えええ……!?!?」

あれ?一夏くん満更でもなさそうな顔してる……

これはチャンスだああああ!

「……い・ち・か・く・ん、なんか嬉しそうな顔してるねえ」

「そ、そんな筈は……!?!?」

「フッフ、今夜は楽しませてあげるからね、一夏くん」

「はあああああ!?!?」

一夏くんの叫びが部屋の中にこだました。

ちなみにこの部屋は防音仕様。さすが国立、設備がいい!

ん……?一夏くん汗くさいなあ……私は別にいいけど……不潔な男子は嫌われるっていうし……

うん、一夏くんにシャワー使わせてあげよう!

「シャワー……浴びたら?少し汗くさいよ?一夏くんの匂いだから私は別にいいんだけどね」

「あ……そうかもしんねえな。先にシャワー使わせてもらおうな!」



「うん！いいよいいよ！……だつて  
一緒に使つんだから………」

「なんか言つたか？」

「ううん、なんにも！」

「ふうん……じゃ使つな」

「どーぞどーぞ！」

そんなこんなで私の計画は成功に近づいていくのだった

ちゃんちゃん

仲直りからの……！（後書き）

作者「アーデルさん……あんた危険だよ！」

磨美「うるさい！ 私の恋路に口を出すな！くらええええ！」

ツインバスターライフル発射！

作者「ぐぎゃあああああ！」

……ただの屍のようだ

クラス対抗戦とアメリカの代表候補生（前書き）

地の文が少ないです、すいません。

今回は新キャラが登場しますよ！

## クラス対抗戦とアメリカの代表候補生

「ん……」

……今何時だろ……？

「……！……遅刻じゃん！」

ああもう！最悪！

一夏くんなんて起こしてくれないの！

って今日はクラス対抗戦の日か……！

今頃一夏くんは鈴ちゃんと戦ってる最中だろうなあ

ってのんきに考えてる場合じゃなかった！

さっさと着替えてアリーナに行かなきゃ！

私は脱ぎ捨てていた制服とYシャツを着て（ちなみにノーブラ……  
だって着けてる時間ないんだもん）すぐにアリーナに直行した

「やっと着いた……」

IS学園校門前。

そこに血のように赤い色の双頭の龍を模したネックレスを着けた雪のように白い髪の少女が立っていた。

「……殺風景だなあ……誰もいないし……」

誰もいない理由はアリーナにほとんどの生徒が集まっているからなのだが、その事を来たばかりの彼女が知っているはずもない。

「本校舎一階総合事務受付……どこにあるんだろ、探さなきゃ……」

探し回った結果、

「あれ……？元の場所に戻っちゃった」

見事に彼女はIS学園を一周してしまい、道に迷ってしまった

「近くにだれかいるわけ「あゝもゝ！一夏くんのばあゝ！」いた  
「！」

少女は、近くを通りかかったこの学園の生徒に声をかけた

「あゝ……」

「ん……？どつたの？」

「本校舎一階総合事務受付ってどこにあるかわかりますか？」

「わかるよ？連れていこうか？」

「はい。お願いします」

そのまま彼女はIS学園の生徒に本校舎一階の総合事務受付まで連れて行って貰った。

「……よしと！ありがとだね、連れてきてもらっちゃって！」

「いいいいいよ！今日はどのみち授業ないし」

「授業ないってどういふ事？」

「今日はクラス対抗戦の日でね、授業がないんだよ。今ごろ、1組と2組のクラス代表がぶつかりあってるころだよ、一緒に見に行く？」

「いいの？」

「良いから誘ってるんでしょ？」

「じゃあ一緒にいきますー！」

磨美 side

「……あ、名前聞いてなかったね、教えて？」

「あ、言うの忘れてた！私はサフィ・マーキス。アメリカの代表候補生だよん」

……はい？

アメリカの代表候補生？

「貴方は？」

「あ、私は磨美・アーデルハイト。イタリアの代表候補生だよ」

「そ、なら同じ代表候補生同士仲良くしようね！」

「うん、よろし」

ズガアアアアーン！

「「きゃっ!?!」

突然、地鳴りと共に、轟音と揺れが足元を襲ってきた

「襲撃……!?!」

「わかんない………だけど断言できるのは………あと三回同じ衝撃がくる………」

私はハイパーセンサーを使ってアリーナの上空を見ていた

そこに写っていたのは赤、紫、黄緑の全身装甲のISらしきものだった。

「……織斑先生、聞こえますか？」

『アーデルハイト、遅刻だ……と言いたいところだが緊急事態だアリーナに一機、アリーナ上空に三機、アンノウンが確認された。現時点でわかっているのは上空の三機の名称だけだ。それぞれ『アルケー』・『ガラツゾ』・『ガデツサ』という。この三機の撃墜をアーデルハイト、お前に任せたい。全て撃墜できたら遅刻の件は不問にしてやる』

「了解しました」

「すみません！その撃墜作戦に私も参加させてください！」

『む？誰だ？お前は』

「私は今日転入してきた、アメリカの代表候補生のサファイ・マーキスです。この作戦は命を危険にさらします！一人より二人で対応した方がいいと思います！」

『しかし……転入早々に実戦などさせては……』

「私はISという兵器を扱う人間です！引き金を引く覚悟ぐらいは持っています！」

『……わかった。くれぐれも負傷だけはしてくれるなよ』

サファイさんの力説に織斑先生が折れた



「ありがとうございます！」

「では、これからミッションに移行します！」

私は織斑先生にそう告げた後、ISを展開した

「……いくわよ、トライデント・ドラゴン！」

サフィさんもISを展開した

そのISは血のように赤くてどこかしら龍をイメージさせた

「さあ、行くわよ！サフィさん！」

「りょーかいつ」

私たちは上空の三機に向かって飛翔した

## クラス対抗戦とアメリカの代表候補生（後書き）

ガデッサなんです。がGNメガランチャーが右腕と一体化していると  
考えてください

殺戮兵器と思春期乙女の恋模様（前書き）

磨美無双の回です

あと、今回、磨美が一夏に×××します

（別にエロくはないけど、この後の物語に凄く関わってきます）

## 殺戮兵器と思春期乙女の恋模様

私は今、赤い全身装甲のISと戦闘中だ

そのISは四肢が異常に長く、その腕でバスターソードを振り回している

ガギン！

私はそれを実体の刃がついたブーメランでそれを受け止めた

「やるようね……でも、これならはずさない！」

私は足の隠しビームブレードを展開、回し蹴りを食らわせようとしたりその刹那

ビュンビュンビュンビュン！

ドギョウウウウン！

私の足の回りに赤いビームが蜘蛛の巣の様に飛んできて、さらに私とアルケーの間に極太ビームが飛んできた

「……なにそれ、自爆しかねないじゃない」

私は全てのビットを展開、それらをビーム発振元に狙い撃たせた

全滅とまでは行かなかったけどかなり数が減った

「墜ちなさい」

私は赤いIS、アルケーの四肢を切り刻み

切り刻み？

おかしい、ISを無人で動かすなんて不可能なはずなのに……………

「どんな殺戮兵器を作り出したのよ……………この開発者は！」

心を持たない兵器なんて、ただの殺戮のためだけに作られた兵器に過ぎない。

兵器を肯定する訳じゃないけど人と心が乗ってこそその兵器だ。

こんな殺戮兵器を放っておくわけには行かない！

私はツインバスターライフルを展開、連結を解除して、両手に持った

「すー、はー……………サフィさん！散開して！」

「はいよっと！」

サフィさんが散開したのを確認して、私は回転しながらバスターライフルを両手撃ちした

そこから放たれるビームは『アルケー』の遠隔操作武器を次々に飲み込み、さらにガデッサの四肢を熔解して、破壊した

ガラッゾは防御行動を取り、アルケーはその後ろに移動し、私の攻撃を回避した

その二機をビットで牽制しながら私はバスターライフルを撃ち続けた

「あ」

私はあることに気がつき、私はそのまま回転しながらバスターライフルを撃ち続けた。

「……………サファイさん」

「了解じゃい！でえりゃっ！」

ビットで自由に動けないアルケーの胸部にサファイさんがヒートロッドを貫かせた

案の定、アルケーは動かなくなり、地面に落っこちて行った。

そして、ガラツゾも展開していたフィールドを保つエネルギーが切れてしまったらしく、私のビームをモロに食らい、溶解した。

「うっは……………磨美りん無双だね」

「……………そんなものじゃないよ、現にアルケーを落としたのはサファイさんじゃない……………って磨美りんって何？」

「あだ名だよ！いいネーミングセンスでしょ？」

……………どこが！

磨美りんって、私と鈴ちゃんが合体したみたいでおかしいじゃん！

「ごめん、他はないの？」

「え〜？じゃあアーちゃん」

なんだ、その布仏さんが呼びそうな感じのは！

だけど布仏さんは私を何故かま〜みんって呼んでる！

「………他のを聞いた私がバカだった………！アーデルでいいんだよ？  
サファイさん」

「じゃ、私のこともサッチーって呼んでくれる？」

サッチーと聞いて棒球団の名誉監督の妻を想像したのは余談だ

私は今、保険室の前にいる

「一夏くん大丈夫かなあ………」

あの殺戮兵器を壊したあと、鈴ちゃんから一夏くんが運ばれたって  
聞いて、私は保険室までやって来た。

私が保険室の扉に触ろうとすると、いきなり扉が開いて、中からほーちゃん（篝）が出てきた

「アーデルか……一夏ならベッドの上にいるぞ。なんでも、全身打撲で動くと痛いらしい」

「そうなんだ……」

「まったく、無理をしおって……」

ほーちゃん……！早くそこを退いて！私は一夏くんに会いたいんだよ！愚痴ってないでそこどいて！

「そう、ほーちゃんも色々と大変だね」

「長々と愚痴ってしまったな。すまない」

そう言ってほーちゃんは保険室から離れていった

よし！これで一夏くんに会える！

私は保険室の中に入って一夏くんのいるベッドに向かった  
だがしかし

「……あや？寝ちゃってる……」

一夏くんはぐっすりお休み中だった。

「……………」



そういえば、一夏くんの寝顔を見るの、初めてだと思う。

一夏くんの無防備な、寝顔を見てみると、唇が疼きだした。

「ちょっとぐらい……いいよね」

私は一夏くんの顔に自分の顔を近づけて……

「んっ……………」

唇と唇を（一夏くんは寝てるけど）合わせた

「ん……………？んんんんん！？」

一夏くんの目が開き、驚愕の表情を目で浮かべる

そして一夏くんはベッドの上でジタバタしたけど、痛みで動くのをやめた。

私もこれ以上はオルコツちや鈴ちゃんに誤解を与えようと思って、一夏くんから唇を離れた。

「あ、アーデル……………今、何を……………」

「キス……………だよ」

いくら唐変木で朴念神の一夏くんでもキスをする事の意味までわからない筈はない。

「……………なんで……………?」

「私が一夏くんの事を愛してるから。……………それ以外に理由なんてない」

「え……………」

たぶん初めてなんだろうな、面と向かって愛してるって言われるのは。私も初めてだもん、面と向かって愛してるって言うのは。

「一夏くん、これから言うことを真剣に聞いて」

私は一夏くんに自分の想いを打ち明けた。

私が一夏くんの事を愛していること

これまで一夏くんに若干過激なアプローチをしてた理由

そして最後に

「私、一夏くんの事、好きだからっ!」

ありつただけの想いを伝えた。

「……………ちょっと……………考えさせてくれないか?」

「……………いいよ。でも条件が二つ」

「条件?」

「一つは普段の生活で不自然な素振りを見せないこと。女子はそういうのに敏感だから」

「ああ……、でも一つは……」

「もう一つはこれの返事の期限は7月7日まで。いつまでも待たされたら愛想を尽かしちゃうから」

なぜ7月7日という日付のチョイスか。

それは、私の誕生日が7月7日だからだ。

そういえばあの三人（篤とセシリアと鈴のこと）のうちの誰かが7月7日生まれだったような気がする。

「わかった……」

「不自然な素振りは見せないって約束でしょ？」

「あ！ああ、わりい！」

「じゃあ私は部屋に戻ってるからね。また後で」

「ああ、また後でな」

「うん。また後で」

そう言っって私は保険室から出て行った

……これが噂にならないことを祈ろう。

噂になったら私が闇討ちされかねないからね。

私は部屋に戻ったあと、寝間着を持って大浴場に向かった

その大浴場で大変な目にあっただのは余談だ。

殺戮兵器と思春期乙女の恋模様（後書き）

やっちまった感が凄いですけどおおお！

## キャラ説明その2

大佐、キャラ説明だ（某蛇風に）

サファイ・マーキス

性別 女

肩書き アメリカ代表候補生

身長 169?

体重 ヒミツ

血液型 A型

容姿 上の上（かわいい系）

瞳 深い緑

髪 白（長さは腰まで）

体つき バスト92? ウエスト66? ヒップ82?

趣味 料理 高いところに登って景色をみること

好きな物 植物 めいぐるみ

嫌いな物 ナルシストな男

備考

IS学園に転入してきたアメリカの代表候補生。

専用IS、フレイルム・ドラゴノイドを所持

授業をサボる事が多いのだが、彼女はなぜか特別対偶で、非行以外の行動は全て認められている（つまりワンマンアーミー）

体が丈夫で、高さ9mから落つこちても骨にヒビ一つ入らないという体の持ち主

暇ができるとゲームセンターでめいぐるみを大量にとってくる。

そのため、彼女の部屋はめいぐるみで埋め尽くされている

## IS説明(前書き)

名称が変わったので書き直しました



## IS説明

### IS説明

機体名 トライデント・ドラゴン

パイロット サフィ・マーキス

### 機体概要

全体的に赤い色調のIS

最大の特徴は両肩についているビームキャノン砲。

太陽光をチャージする事で、ソーラーキャノン、月の光チャージする事でムーンライト・キャノンを撃つことが出来る

ヒートロッドやヒートショーテルなど加熱武装が多い

### 武装

ヒートロッド

フレーム・ドラゴノイドのメイン武装

ビームソード

背中エネルギーパックから直接エネルギーを供給しており、高出

力の刃を作り出す。

ダブルガトリングガン×2

普段は肩に懸架されている実弾の武装

二連装式で連射性能がいい

ヒートショーテル×2

円弧の様に湾曲した独特な刀身を持つ大剣。赤色化した高熱の刃で敵の装甲を溶断する。

マイクロミサイル×56

腰アーマーに内蔵されている小型のミサイル

攻撃によく使用されるが、敵に接近された時の弾幕の役割も果たす

**部屋替え？そんな道理私の無理でこじ開ける！（前書き）**

はい、某ハムさん風タイトルですよ

今回は磨美がかなりエツチになっています

**部屋替え？そんな道理私の無理でこじ開ける！**

「アーデルハイトさん、お引越しですよ」

「え……」

夕方、小説を読んでいた私の所にやって来た山田先生は私に死刑宣告を突きつけてきた

「部屋の調整が付いたので今日から同居しなくてすみませよ」

「爆熱！ゴツドデコピイイイン！」

ガスッ！

デコピンとは思えない音が寮の廊下に鳴り響いた

「あ痛あ！」

「何が『部屋の調整が付いたので今日から同居しなくてすみませよ』ですか！そんなの私が一夏くんと一緒にいるのを嫌がってるみたいじゃないですかっ！二度と来ないでください！」  
ボタン！

扉を乱暴に閉めて私はラノベをまた読み始めた

さっきからバンバン扉を叩く音がしているけど無視！！

山田先生 side

「アーデルハイトさん、開けてくださいい~~~~」

こんにちは、山田真耶です。

さっき、アーデルハイトさんに「部屋の調整が付いたので今日から同居しなくてすみですよ」って言ったら凄く怒られて、ドアを閉められてしまいました

「アーデルハイトさん！さっきのは謝りますから！ドアを開けてください！」

「.....」

ああああ！山田真耶、一生の不覚です！

大事な生徒を怒らせてしまっただなんて、教師失格です~~~~~  
！（泣）

「アーデルハイ「落ち着かんか馬鹿者」ひゃう！」

うっうっ.....地味に痛い.....！

私に与えられたおでこの衝撃は目の前にいる、織斑先生が与えたみたいです

「何があった。簡潔に説明してくれ」

「は、はい。さっきアーデルハイトさんに部屋替えをする事を伝えるに言ったらアーデルハイトさんをなぜか怒らせてしまって……………今に至ります」

「ほう……………では一つ頼むが山田君、アーデルハイトに言った言葉を聞かせる」

「えっ、あ、はい。わかりました。確か……………『アーデルハイトさん、お引越しですよ』と『部屋の調整が付いたので今日から同居しなくてすみませよ』だったはずですよ」

「ユニバアアアアス！」

「びぎゃあ！」

私が織斑先生に言われた通りの事を言うと、いきなり意味不明な雄叫びと共にアツパーパンチを食らわされました

「すまなかった。今のはわざとだ」

私は眼鏡を拾って……………あ、眼鏡にヒビがはいつてしまいました

「わかりますよ！そんなことぐらい！」

「私がなぜ殴ったかわかるか？わかるはずだな？わからないなら消えろ」

うわあ……………さりげなく酷いと言われたような気がする……………

「……………？」

「『わからない』という顔だな？よし、なら消える。思春期女子が男子に抱く感情もわからぬ愚か者め」

「あ………！」

「鍵を渡す。そして十秒以内にアーデルハイトに謝れ、部屋替えの事は私が説得する。………10、9、8」

「は、はいいいいい！」

ガチャ………

「山田先生、うるさいです」

### 磨美 side

「山田先生、うるさいです」

私は廊下があまりにもうるさいのでドアを開けて、そう言った

「あ………すみませんでした、アーデルハイトさん。さっきの件も含めて………」

「もういいですよ。私もカツとしすぎてしまいましたから」

「喧嘩両成敗って事ですね」

「はい！」

「ん、ん、っ！アーデルハイト、部屋替えの事は知っているな」

あ、織斑先生がいたこと忘れてた

「あ、はい」

「今日中には部屋を変わらなくていいが、明日の午後6：00までには荷物をまとめておけ、わかったか？」

「は、はい。わかりました」

「あとそれと」

「なんですか？」

「私の存在を忘れるなよ」

「は、はいいい……」

私は某配管工の兄弟みたいに織斑先生の前に小さくなってしまった

誰かキノコor星を~~~~~！

「それでは明日の午後7時に、ここにまたきますね！」

「わかりました」

そう言って私はドアを閉め、また本を読み始めた。



……とは言ってもこの本かなりえっちいんだよね

まあ、来るべき体を使っての対話のために勉強しないと……

今更だけど私ってかなりエッチなんだな……

「……………」

その後も私は本を読み続けて読み終わった頃には日が沈んでいた

「ただいまー」

「あ、一夏くんおかえり」

本を読み終わって、しばらくポーツとしてたら一夏くんが帰ってきた

「一夏くん、さっき山田先生が来てね、部屋の調整がついたからお引越しをしてくださいって私に言ってきたの」

「そーか。ま、俺は一人でも大丈夫だから、引越してもいいぞ」

「ふふ、一夏くんならそう言うと思った」

「はは、なんでもわかるって訳か」

「伊達に恋してる訳じゃないもの。一夏くんの性格はだいたい把握

したから」

「あ……ああ、そうだな」

未だにあの時の事が気恥ずかしいのか一夏くんは顔を天井に向けた。

「……あー、一夏くん？私着替えるから。あっち向いてて？見たいなら見てもいいけど」

そう言っつて私は服を脱ぎ始めた

「だあああ！なんでそうなるんだ！見ねえから！」

「ええ、私はどつちかって言っつと見て欲しかったんだけどなあ……」

「アーデル、怒るぞ？」

「怒っつたら泣いちゃっつよ？」

「……っつ」

さすがに女の子を泣かせるのはまずいと思っつたのか一夏くんは口もっつた

ま、泣かないんだけどね。

ちなみに一夏くんと話てる間も私は服を脱いでいる。

ズボンまで脱いで私はその行動を止めた

そして、ドアの方向を向いている一夏くんに近寄って……抱きついた

一夏 side

「ちょ……アーデルっ？」

俺がアーデルの事を気遣って、ドアの方向を向いていたら後ろからいきなりアーデルが抱きついてくるという状態になった。

「引越す前に一夏くんエネルギーをチャージしておかなくちゃ……」

「……俺エネルギーって何だよ……？っ!？」

アーデルの腕が俺の上半身を這うように動き、そして服を掴んだ

「……服が邪魔ね……」

そして服を掴んだ手をIS化させたアーデルは俺の服を

ブチブチブチィ!

簡単に破いてしまった

普段のアーデルの力では破る事のできない衣服でもISのパワー

シストの前には紙同然だった

素肌を晒してしまっている俺の胸元をアーデルはなぞる様に

やべ、若干感じちまった

まずいまずいまずいまずい非常にまずい！

こんなところを箒や鈴、あとセシリアにみられたら確実に殺される！

「一夏くんエネルギーチャージ完了……寝よつと」

「……はぁ……はぁ……はぁ……」

そう言つてアーデルは俺の体から腕を離し、ベッドにおぼつかない足取りで向かっていった。

ちなみにその体は後ろからでもわかるぐらいの爆乳でその胸を揺らしながら

はっ！何を凝視してるんだ！俺は！

コンコン

「ん？」

さっきまでのアーデルの攻勢に理性を根こそぎ持ってかれた俺は今のノックで理性を取り戻した

俺は破られた服のまま、ドアを開けた。

「……………」

「…………… 篝？」

ドアを開けると立っていたのはいつも通り、むすっとした顔の篝だった

「…………… なんだその格好は。新しいファッションでも見つけたのか」

ぐあ、言われると思ってたけどかなり来るな、精神的ダメージが。

「…………… まあいい。……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「篝、用がないなら「用ならあるんだっ！待ってくれっ！」お、おう」

おいおい、篝。そんな大きな声を廊下で出すなって。鬼寮長ちふゆねえに怒られるぞ？

「こっつ、今月末の学年個別リーグマッチなのだがっ」

六月末に行うらしいそれは、クラス対抗戦とは違い、全員参加の個人戦らしい。一週間内に各学年、全校生徒を戦わせると言った凄い

大規模な行事。

学年別でくぎられている以外は特に制限もないらしい。

しかし専用機持ちが圧倒的に有利なのは変わらない。うん、世の中ってアンフェアな事ばかりだ。

「わ、私が優勝したら」

ん？　なんで箒は赤くなっているんだ？　熱でもあるのか？

「付き合ってもらおう！」

「……は？」

付き合っちゃって……

いや、箒の事だから買い物とか剣道の練習だろうな。

たぶん

そう言ったあとおそらく全力疾走で箒は走り去った。

「聞いた聞いた？」

「うんっ！聞いたよ聞いたっ！」

「これはおもしろいことになるよーっ」

同時刻、俺と箒のやりとりを見ていたやつがいたことを俺は知らない

金髪の貴公子（前書き）

あー……………妙に新しい小説が投稿したくなってきた……………

## 金髪の貴公子

部屋替えの日、私は一夏くんと一緒にいらなくなる（とは言っても学校で毎日会えるんだけど）事にかっかりしながら部屋を移動した引越し先の部屋番号は1134だ

「1131……1132……1133……あつた」

もといた部屋からそれほど遠くないその部屋のドアノブを回すと鍵が開いていた

「……？入ってもいいかな……」

とは言うものの、ここは私の部屋でもある。なら入ってもいいはずだ。

「……入っちゃえ」

私は部屋の中に入って部屋を確認した

まず目に入ってきたのは無造作に脱ぎちらかされた制服があるというもの。

誰かいるなと私は確信し、部屋の中を進んだ

進んで行くとドアに近い方のベッドに見覚えのある白い髪の子が寝ていた



「……えつと確か……サファイ・マークスさんだっけ……」

「ん…………ふああ…………ん？」

「おはよ、サツちー」

「んむ？アーちゃん？おかしいな、ここは私の部屋でアーちゃんがいる筈が……ならこれは夢だ！夢に決まってる！」

なんか夢ってことで結論付けてる……

「へー、夢ならつねつても痛くないはずだよねえ…………？」

私はサファイさんのほつぺたを思いっきり横に伸ばした

「いだだだだだだ！前言撤回！これは現実！」

「サツちー、私今日からこの部屋に住むことになったから、よろしくね」

「うん、よろしく。じゃああたし寝るから。おやすみ」

そう言ってサファイさんはまたベッドに潜りこんだ

「…………ZZZZZZZZ」

「…………寝るの早っ…………話し相手がなくなっちゃったから寝よう」

私はシャワーを浴びたあと、ベッドに飛び込んだ

さてさて、明日は平穩に過ごせることを祈ろうっと

その磨美の祈りを神様は聞き入れることは無かった

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

……え？

男子……？

「お、男……？」

あ、誰かが私の考えてる事を代弁してくれた

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

」

「きゅん……」

……！

来る……！やつが来る！

「きゃ？」

「きゃああああああああああああああああああ！」

うううう！頭ががんがんするぐらい響く声だああ……！！

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

ナイス織斑先生！

織斑先生の鶴の一声でさつきまで騒いでいたみんながおとなしくなる

「皆さん、まだ自己紹介は終わってませんよ」

私は山田先生の声に反応して、もう一人の眼帯をしている銀髪の人をみる

その人は口を開かずにただ織斑先生を見つめている

なんだろう、この人は織斑先生信者なんだろうか

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

織斑先生があの人教官？

どういふ関係なんだろう……

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そしてラウラ？さんはまるで軍人みたいにピシッとして、口を開いた

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

……暫しの沈黙

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

偶然、ラウラさんと一夏くんの目が合う

「！貴様が……！」

ラウラさんは一夏くんに歩みより……

バシンッ！

……！

今……あいつは何をした？

答え：一夏くんに平手打ちを食らわせた

……

この瞬間、私の中でアイツを殴る許可が出た

ほら、いうじゃない。目には目を、歯には歯をって

一夏くんが銀髪のヤツに猛抗議してるけど銀髪のヤツは軽く受け流して私のいる列の隣を通って……私の隣を通りすぎようとした

その時、私は口を開いた

「待ちなよ……………」

「……………フン」

銀髪のヤツは私を無視して通りすぎようとした

「待てって言うてんのよ！銀髪！」

私は銀髪の腕を掴み、思いっきり殴り付けた。

「何の恨みがあって一夏くんを殴るのよ！」

「そう言う貴様こそなぜ私を殴った」

「あんたに教える筋合いなんてないわ！」

私はもう一発殴り付けようとしたけど、それは叶わなかった

見れば私の腕に何かロープのような物が絡まっている

そのロープが飛んできた方向に視線を合わせるとそこには白髪の女の子 サファイ・マークスがロープを持って立っていた

「磨美りん、二発も殴るのはアウトだよ」

その言葉で私の頭にのぼっていた血が一気に下がった

「……マークス、遅刻だが今のでキャラにしてやる」

「ありがとうございます〜！〜！」

「ついでだ。自己紹介もしろ」

「はい」

サファイさんはロープを足で押さえながら自己紹介を始めた

「アメリカから来たアメリカ代表候補生のサファイ・マークスです。特技はロープを狙ったものに必ずヒットさせることです、今みたいだね。今日からよろしくっ」と

そう言った後、サフィさんは私に近づいて、ロープをほどき始めた

「あー……ゴホンゴホン！ ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でES模擬戦闘を行う。解散！あと織斑！デユノアの面倒を見てやれ、同じ男子だろう」

そんなこんなで朝から大変なことが起きてしまった

**金髪の貴公子（後書き）**

ラウラ党の皆さんスイマセン！

とは言いつつ自分もラウラ党なんすけど！



**童顔だけど強いんです(前書き)**

こんばんは。

Gジェネレーションワールドにはまってしまった作者です。

ダブルオークアンタとストフリかっこよすぎるし！

童顔だけど強いんです

一時限目の実戦訓練に向けて私たちは教室でお着替え中だ

今回は特別に音声のみでお送りしますby作者

「んっしょっ」と

「わあーま〜みんなおっばいおっきい〜」

「ホントだ！なん？ぐらいあるの？」

「え〜、はつきりと計ったことはないけどざっと1000？ぐらいはあると思うよ」

「ひゃっ、1000?!?!おっきすぎない?」

「そりゃもう。おまけに重くてね。おまけにジャンプする度に跳ねまくっていたいんだよ?」

「あーわかるわ、それ。磨美りんも同じ悩みの持ち主だったか」

「サッチーも胸おっきいしね……」

「着る服も制限されるからな。困ったものだ」

「ほーちゃん、諦めちゃダメだよ。あえて胸を露出させるファッションがあるから」

「そんな破廉恥な格好は私には合わん！」

「あ、ほーちゃんが怒っちゃった」

「怒ってなどいない！」

「うししし！ま〜みんおっぱいとお尻を揉ませなさ〜〜〜い」

「えっ、や、やめてのほほんさん！あ、ああっ、あぁー！..」

「これ以上は妄想が広がりすぎるのでこのままで 後は読者の皆さんに任せます」

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「~~~~はい！~~~~」

今日は二組と合同授業だから聞こえてくる声も二倍だなあ！

みんな元気があつてよろしい！

と言いたいところだが私の後ろでは……………

「くっくっ……………。何かというとすぐにポンポンと人の頭を……………」

「…………一夏のせい一夏のせい一夏のせい一夏のせい一夏のせい一夏のせい一夏のせい一夏のせい一夏のせい一夏のせい一夏のせい一夏のせい一夏のせい一夏のせい一夏のせい一夏のせい一夏のせい一夏のせい一夏のせい一夏のせい……………」

オルコツちと鈴ちゃんがブツブツ言っていた。

実はさつき、この二人は織斑先生に叩かれているのだ

鈴ちゃんに至ってはなんか呪いの呪文みたいに同じ言葉を連呼していた

「では、今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活気溢れんばかりの十代女子が二組もいることだしな。 鳳！ オルコツト！

アーデルハイト！ マーキス！」

「はい……」

「ど、どうしてわたくしまで……」

「専用機持ちはすぐに始められるらだ。いいから前に出ろ」

「だからってどうしてわたくしが……………」

「一夏のせいなのになんでアタシが……………」

「お前ら少しはやる気を出せ あいつにいいところを見せられるぞ……」

わっ、人の恋心を利用するとは……………許すまじ！

「どうしたアーデルハイト、なにか言いたそうだな」

「心を読むのは止めてください、織斑先生」

「断る」

即答でした！残念！（某ギター侍風に）

「やはりここはイギリスの代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの！」

……………単純な馬鹿が二人もいた

「それで、相手はどちらに？ わたくしは磨美さんとマーキスさん  
とでも構いませんが」

「ふふん。それは面白そうね。やる？」

「慌てるな馬鹿ども。対戦相手は」

「あああーっ！ど、どいてくださいっ！」

一夏くんの上に迫る影……………

はっ！このままだと一夏くんが危ない！

「……………！一夏くんっ」

私はISを展開、一夏くんと上から落ちてきた影の間に入り込んだ  
ズガアアアアン！

「……………ふう、山田先生気を付けてください！」

私は山田先生にそう言いつけた

「す、すみません！」

「ホントに気を付けてくださ……………あ……………！」

私はいきなり体を貫いてきた快感に私は喘ぎ声を出してしまう

胸元を見ると一夏くんの手が私の胸を鷲掴んでいた

ふにゅっふにゅっ

「んっ……………だめ……………だよ……………一夏くん……………！」

一夏くんが自分のやっていることに気がついて顔を上げた瞬間、私  
と一夏くんの間にレーザーが飛んできた！

「おわぁっ……………」

「ホホホホ……残念です。外してしまいましたわ……」

怒れる蒼穹の狙撃手、セシリア・オルコットが笑いながら怒っている

「……」

ガシーン！

ブンブンブンっ

今度は鈴ちゃんの双天牙月が飛んできた！

まずい……！私は一夏くんを守ることです！一杯なのに……！

ダンッダンッ！

ガキインッ！

短く二発、火薬銃の音が響く。弾丸は正確に『双天牙月』の両端を叩き、軌道を変える。

そんな神技を披露したのは

「大丈夫ですか織斑くんにアーデルハイトさん？ 凰さんにオルコットさん、危険ですので許可なく武装を相手に向けてはいけませんよ？」

「まったく、授業が進まないだろう。おい小娘ども、さっさとはじめろぞ」

織斑先生がかなり呆れたようすでそう言う

「え？ 山田先生と四対一で？」

「いや、さすがにそれは……」

「誰も四対一でやれとは言っていない。タッグを組んで山田くんと二対一で戦ってもらおう、それとアーデルハイト、いつまで織斑に抱きついていて、いいかげん離れる」

「あ、すみません……ゴメンネー夏くん」

「あ、ああ……」

私は一夏くんから離れて、サフィさんに近づいていった

「サッチー、私と組もうよ」

「もともとその気だったけど？それに一度組んでるじゃん」

「だね、じゃっ決まりっつと」

「決まったか。なら鳳、オルコットから始める！」

織斑先生の声を合図にオルコツちと鈴ちゃん、山田先生は飛翔した



## V S 山田先生

織斑先生の言葉を合図に、鈴ちゃん達が戦闘を開始した

「手加減はしませんわ!」

「さっきのは本気じゃなかったしね!」

「い、行きます!」

まずオルコツちがビットで射撃を始めた

あゝあ、これじゃ的にしてくださいって言うてるようなもんじゃない。

オルコツちはビットを動かすのに集中するためにそれ以外の行動ができなくなるのに……………

鈴ちゃんは衝撃砲を撃ちまくっているけど山田先生は回避と防御でその全てをいなしている

「さて、今の中に……………そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説を試みる」

「あつ、はい」

上空での戦闘を見ながら、シャルルくんが解説を始めた。

にしてもシャルルくんって女って言うても通じる顔だな……………

某男子校に転入した女子が出てくるドラマを思い出すよ

「山田先生の使用されているISはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。」

いちいち書きにくめのどんどの省略

でも、知られています」

シャルルくんが説明し終えたとき上でも決着がついた。

どっちの勝ちかと言つと

「くっ、くっ……。まさかこのわたくしが……」

「あ、アンタねえ……。何回面白いように回避先読まれてんのよ……」

「り、鈴さんこそ！ 無駄にはかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわー！」

「こつちの台詞よ！なんですぐにビットを出すのよ！しかもエネルギー切れるの早いし！」

うん、鈴ちゃんとオルコツちの負けだ。

にしても二人とも仲がいいなあ。

喧嘩するほど仲がいいってほんとなんだね。

「次、アーデルハイト、マーキス」

「はい」

織斑先生に言われて私はISを展開して、サフィさんの隣に立った

「やってやるうじゃん、ねー、磨美りん？」

「サツちー、油断しちゃだめだよ。鈴ちゃん！仇は討ってくるからね！」

「頼んだわよー！」

「山田先生、状態は」

「いつでも行けます」

「そうか、なら……………始める！」

私達は織斑先生の声を合図に攻撃を開始した

まず、私が足のビームブレードで斬撃を食らわせようと試みるけど、山田先生は近接ブレード、『ブレードスライサー』でいなしている

「……………！侮れない……………サッチー聞こえる？」

『ほいほい？なんじゃらほい？』

「ヒートロッドを構えといて」

『りょーかい了解っ！』

サファイさんに指示したあと、私はデスサイズを展開して、山田先生に突貫した

デスサイズでブレードスライサーと小競り合いをしながら私はマシンキャノンを連射した

動けない山田先生にそれは全弾ヒットして、シールド・エネルギーを削る

「サッチー！」

「All right! てえりゃっ!」

サフィさんのヒートロッドが山田先生の腕に巻きつく。

そしてそれは灼熱化し、ISのアーマーをじわりじわりと溶かしていく。

「っ……!」

山田先生にもその熱が伝わっているのか、山田先生は顔を少し歪める

「隙あり……!はあっ!」

「きゃっ!」

私は山田先生の手からブレットスライサーを弾き飛ばし、一気に斬撃を加える

ある程度斬撃を加えた後私はデスサイズを収納、ツインバスターライフルとビームキャノン、さらにビットを全機展開して山田先生に照準を定める

「狙い撃つ!」

「終わりにさせる!」

まず、サフィさんがマイクロミサイルを大量発射。

山田先生はマシンガンを展開した片腕で迎撃しようとするけど、さ

さすがに無理らしく、ほとんどのミサイルがヒットする。

「余所見はダメですよ、山田先生！」

私はバスターライフルとビームキャノンとビットを発射。

山田先生は気がついたけど時すでに遅し、私の放った全てのビームに直撃した

「そこまで！」

私がビームを撃ち終えたとき、織斑先生が私達にストップをかけた

「アーデルハイト、お前は加減というものを知れ。マーキス、お前の場合機体性能に頼りすぎだ。機体の性能差が勝敗をわかるわけではない」

あ、織斑先生、うちの技術者と全く同じこと言ってる。

これには私も共感した。

ていうかあの技術者、名言をめちゃくちゃ言うし。

パンパン！

あ、織斑先生が何か言うかも

「さて、模擬戦の実演も終わった。早速授業に入る。専用機持ちはアーデルハイト、織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、鳳、マーキスか。では八人グループになって実習を行う。各グルー

ブリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では分かれる」

織斑先生がそう言うと、回りにいたみんなが一夏くとシャルルくんの所に向かう

「織斑君！一緒にがんばろう！」

「わかんないとこ教えて〜」

「デユノアくんの操縦技術みたいなあ」

「ね、ね、私もいいよね？同じグループに入れて！」

「おーい、皆織斑先生を怒らせないよーにねー」

私がそう言った瞬間、皆が顔を真っ青にして適当に八人にわかる。

うん、みんなわかりやすいね

その後、銀髪眼帯女の班が遅れたり一夏くんがほーちゃんをお姫様抱っこ……………お姫様抱っこ……………いいなあ……………orz

妬くような事は頭の片隅において、それ以外に問題はあまり起こらなかった

## 一夏くとシャルルくん

転校生がやって来て五日がたった

一夏くんの特訓には、シャルルくとサッチーも加わっているんだけど……

「「「……………」」」

ほーちゃん達がさっきからジト目で見てくるのが気になって仕方ないんだけど……………」

「……………私の説明のどこが悪いのだ……………」

「わたくしの理路整然とした数学的な説明のどこがいけないのですよ……………」

「……………あんなにわかりやすく説明してんのになんで理解しないのよ、馬鹿」

……………百歩譲ってオルコツちと鈴ちゃんのは良しとして……………」

ほーちゃんの擬音語はダメでしょ……………」

でもこの前そんなの私でもわかるわけがないって言うたら思いっきり竹刀で叩かれたし……………」

……………うーん……………酷いなほーちゃんは。



あ、だいぶ話が横道にそれちゃった。

さつきシャルルくんと一夏くんが模擬戦をしたんだけど一夏くんはシャルルくんに全く間合いを詰められずに完敗したのだ。

まあ……一夏くんのイグニッション・ブースト瞬時加速は直線的でわかりやすいからなあ……

移動先さえ読めれば銃弾を当てることなんて簡単だからね。

「あ、瞬時加速中は無理に軌道を変えないほうがいいよ。空気抵抗とか圧力の関係で機体に負荷がかかると、最悪骨折とかするからね」

「……なるほど」

「アタシなんかそれやって何回骨折したか！その度に兄貴に怒られるし！『俺の作ったISで骨折は絶対にするな』ってね」

あ、サッチーあっさりともない事を言ってる

「そ、そうなんだ」

サッチーの言葉にシャルルくんも苦笑いしちゃってるし

「あれ？サッチーのISってサッチーのお兄さんが作ったの？」

「え、あ、うん。コアは量産機のやつだけだね。」

「へー、凄いんだサッチーのお兄さん」

私がそう言つと、サッチーは何故か顔を暗くした

「……サイテーだよ。あの兄貴は」

「……なんで？」

「……あのバカ兄貴はアルティメット・システムを作り出したんだ。人を壊すシステムを……！」

え……？

私のISにも搭載されてるアルティメット・システムを作ったのはサッチーのお兄さん？

「……なんてね。今のは冗談。……続けていいよ」

そう言ったサッチーはアリーナの日陰にいて、地面に座り込んだ

「」

……アルティメット・システムを作ったのはサッチーのお兄さんって話……あれはサッチーの表情からして、本当の話だ。絶対に……

「え、ええと、じゃあ、射撃武器の練習してみようか！はい、これ」  
シャルルくんがその場の空気を変えようとして、一夏くんに銃を手渡した

「え？他のやつは武装って使えないんじゃないか？」

「一夏くん、ISの装備はね、操縦者が許諾すれば誰でも使えるよ

うになるんだよ」

「へえ、そうだったのか」

「うん、今一夏と白式アンロックの使用許諾を発行したから、試しに撃つ  
てみて」

「お、おう」

「あ、私がアシストするよ」

「あ、お願いするよ。アーデルハイトさん」

私は一夏くんの後ろに回り込んで、一夏くんの手を持つ。

そして偶然をよそおい、胸を一夏くんの背中に押しつける

「んっ……一夏くん、もう少し脇を閉めて、後、左腕はこっち」

若干喘ぎ声を出してしまったが、スルーして欲しい

「あ、ああ。……こっつか？」

「そう、そんな感じ。センサーリンクはできてる？」

「さっきから探してるけど見当たらない」

「なら目測で撃つて。大丈夫、一夏くんなら出来るから」

私はそう言って一夏くんから離れる

私が離れたら今度はシャルルくんが一夏くんのアシストをする。

バン！

一夏くんが弾を的に向かって発射する

余談だが、私がこの前発生装置を破壊してしまった事が織斑先生にばれて、壁と床がコンクリートの部屋に閉じ込められたのだ

あの部屋、昼間はサウナと同じくらい……いやサウナより暑くて、夜は夜で寒いし……

とにかく、色々大変だったのだ

そうこうしているうちに一夏くんは弾を撃ち終えていた

そして、なぜかアリーナが騒がしい

「ねえ、ちょっとアレ」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……」  
みんなの眼差しの先には

「おい、貴様」

ラウラ・ボーデヴィツヒが立っていた



命で創られた羽（前書き）

千冬さんがヤバイです。

後半ネタに走りました

## 命で創られた羽

「おい」

いきなり現れたラウラ・ボーデヴィツヒがISのオープン・チャネルで一夏くんに話しかける

「なんだよ……」

一夏くんは不機嫌そうにその通信に返事をする

基本的に誰にでも優しい一夏くんがそうなるのも仕方ないことだ。だって一夏くんはあのカス（ラウラ）に訳もわからずぶたれてるんだから

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様には無くても私にはある」

「……その理由を話しなさいよ」

私はカス（ラウラ）にその理由をきいた

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業を成し遂げただろう」とは容易に想像できる。だから、私は貴様を　　貴様の存在を認めない」

……は？

なにそれ、逆恨みじゃないの？

馬鹿馬鹿しいったらありゃしない

「また今度な」

「ふん。ならば 戦わざるを得ないようにしてやる！」

カスがISを戦闘状態にシフトさせ、大型のレールカノンを一夏くんに向けた

ドオオオン

ドギユウウン！

私は即座にISをフル展開、肩のビームキャノンとツインバスターライフルをその砲弾に向けて発射した

ビームが消えた後、残っていたのは大部分が溶解した砲弾だけだった

「！ 邪魔をするなっ！」

「存在を認めないとかふざけんじゃないわよ、ドカスがあ！」

「そんな男のどこに存在する価値があるというのだ！」

「黙れええええ！」



私はアルティメット・システムを80%の力で起動、そして一気にカスのもとに飛翔し、デスサイズをカスに向かって振り上げた命で創られた羽が大量に撒き散らされていく。

「くっ…！」

しかしカスが右手を構えた瞬間、私の体は動かなくなった

たったそれだけのことなのに、私の体は金縛りにあったみたいになくなってしまった

……まずい……

アルティメット・システムの起動時間がただ過ぎていく……

『その生徒！ 何をやっている！ 学年とクラス、出席番号を言え！』

「ふん、命拾いしたな」

あっさりと戦闘体制を解除したカスは私を拘束から解除し、身を翻して帰っていった

「……」

私は一夏くんの元に帰り、ISを解除した

「……」

その瞬間、私は地面に膝をついてしまい、血を吐いてしまった

「おい、磨美！」

「アーデルハイトさんっ!？」

「アーデルっ!しっかりしろ！」

「……大丈夫……単なる副作用だから……」

「副作用って何のだよ！」

「そうですね!それに吐血をしている時点で危険ですわ！」

「しっかりしなさいよアーデルん！」

「……」

皆が私を心配して寄ってくるなか、サッチーだけが目を見開き、立ち尽くしていた

……あ……そっか、アルティメット・システムを作ったのはサッチーのお兄さんだっけさっき言ってたから……

「……サッチー……」

私はプライベートチャンネルをサッチーのチャンネルに繋ぎ、話しかけた

『……』

「サッチーは悪くないんだよ……アルティメット・システムは積んでるISを使ってる私が悪いの……」

『……』

「ホントに、サッチーは悪くないからね……」

『……』

返事は返ってこないけど、今はそれだけを伝えたかった

いい終えたとき、私は意識を手放した

「……う……」

次に私が目覚めた時、私は保険室のベッドに横たわっていた

「目覚めたか」

隣には織斑先生が立っていた

「色々と聞きたいことがある。まずはアルティメット・システムの事だ」

「……」

「本来ならばクラス代表決定戦の後に聞いておきたかったのだがお

前がさつさと帰ってしまったせいで聞けなかったから今聞く。なぜあのような危険なシステムを積んだISを使用する」

「……私が望んだからです」

「なに？」

「……元々、私のネーブ・テンペスタにはアルティメット・システムを搭載する予定はなかったんです」

「……ならなぜ積んだ」

「……自分を犠牲にしても、守りたいものがあつたからです」

わかっていると思うが私の守りたいものは一夏くんの事だ

それと同時に、私は一夏くんに守られたい

お互いを守りあえる存在に私はなりたい、ただ、それだけ

「……話を変えよう。アーデルハイト、お前は織斑をどう思っている」

「友人と恋愛対象で好きですけど、問題でもありますか？」

「フツ……そうか。……ゆっくり休めよ」

「あ、ありがとうございます」

織斑先生はそう言ってカーテンを閉めた

その刹那

ドゴオオオン！

「ひゃっ！」

大きな音がして、私はびっくりしてしまった

私がカーテンから顔を出して外の様子を見たらそこには織斑先生が

ーパー 色の脚スペシャルを生身の状態で放っていた

「ふんっ！」

次に織斑先生は拳を地面に叩きつけた

その刹那

ズガガガガガガガガ！

なんと織斑先生は素手で炸裂 イアクラッシュャーを放っていたのだ

「おっかないから寝よう……」

流れ弾が回ってこないことを祈ろう。死んじやうから

……ていうか素手であんな技を使えるなんて人外じゃない……  
……

それは私の心の奥にしまっておこう。次は 級 王電 弾が飛んで  
くるぞ

その夜、私はヒヤヒヤしながら眠りについた

模擬戦なんだヨオオオオオ！（前書き）

某炭酸風タイトルです

模擬戦なんだヨオオオオオ!

サフイ s i d e

初めての私目線……

じゃなかった、今は雑念を取り払わないと……

今、イギリスと中国の代表候補生がドイツの代表候補生相手に戦っている

今現在の状況を説明するなら、ドイツの方が圧倒的に有利だということ

なぜ、私の存在がああ三人に知れていないかと言うと今現在、私は光学迷彩をはって、バレないようにじっとしているからだ

「(磨美りんが今戦えないからドイツの代表候補生がああ二人に行き過ぎたことをしたら止めに入らないと……)」

そんなことを考えながら私は三人の戦闘を見ていた

数分後

………光学迷彩を剥がしましょうかね



だって今ドイツの代表候補生が二人の首にワイヤーブレードを巻き付けてるんだもの

下手をすれば死にかねない…！

「……光学迷彩、解除」

私がそう言うと私のISに展開されていた光学迷彩が消えた

「やらせない！」

私は一気に加速し、ヒートロッドをドイツの代表候補生が駆るISに向かって振った

「フン、甘いな」

ドイツの代表候補生が手をかざすと、私の体は昨日の磨美りんみに動かなくなった

「甘いのはそっち」

私は肩のビームキャノンから牽制用ビームを発射してその拘束から体を解放した

「圧倒させてもらおうわよ」

「どの口が…！」

ダブルガトリングガンを両手に構え、乱射し始めた

「無駄だ！」

ドイツの代表候補生は　　めんどい、ボーデヴィツヒさんは右手を構え、私の放った銃弾を全て止めた。

おそらく、この能力は前にバカ兄貴が言ってたドイツの第三世代兵器、A I Cだ。

厄介な代物だけど、弱点は学習済み。

さっき、ビームを撃った時、そのA I Cが解除されていた

おそらく、止める対象に意識を集中させないと、発動しないんだろう

「……………ミサイルコンテナ、フルオープン」

私は銃弾を放ちながら、腰のミサイルを全て放つ

「くっ……………！これ以上は……………」

ボーデヴィツヒさんはワイヤーブレードを射出、それでミサイルの中心にあるやつを爆発させ、全体に誘爆させた

「もらったー！」

私はその煙の中から飛び出し、ヒートショーターを構え、ボーデヴィツヒさんに降りおろした。

ポーデヴィツヒさんもプラズマ手刀を展開して、それを振り

ガギンツ！ガギンツ！

私の降りおろしたヒートショーツは見覚えのある  
ていう  
か毎日見てる人に止められた

「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「お、織斑先生！？」

その織斑先生はいつもの服で、ISの近接ブレードを片手持ちして  
いた

いや、どれだけ人外なのよ、ISを使わずにISの装備を使うなんて……

「模擬戦をやるのはかまわん……が、他の生徒のアリーナ使用の邪魔はするな。それは教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントで付けてもらおうか、お前たちもそれでいいな、織斑、デュノア」

「はい」

あり？織斑君とデュノア君いつの間に来てたの？  
まあいいけど

そんなこんなで今日の騒動は終わりをむかえた



模擬戦なんだヨオオオオオ！（後書き）

磨美「私の出番は？」

作者「今回はナシで、ISを使えないんだし」

磨美「えー。でも学年別トーナメントでその分活躍させてもらえるよね？」

作者「愚問！」

復活！（前書き）

繋ぎみたいな話です

復活！

サファイがラウラの相手をした日から二日後、磨美は完全復活を遂げていた

「ふっかーっ！」

ピョンピョンと跳ね回る私の近くをくるくる走り回るのはサッチーだ

「あ、アーデルん」

そんな私達の近くに やって来たのは鈴ちゃんだった

「や！鈴ちゃん」

「や、アーデルん。もう体は大丈夫なの？」

「大丈夫だよ！」

えっへんと胸を張ると制服の中で、

ブチン！

という音がした

「……………」

ああっ！鈴ちゃんが血の涙をながしちゃってる！

「……………あれ？鈴ちゃんその頬つぺたの絆創膏はどうしたの？それに、ISのブレスレットもないし……………」

「あ、ああ……………一昨日ねちょっとボコボコにされちゃって」

……………ボコボコにされた？

「誰に……………？」

「あいつよアイツ！眼帯の！」

「……………」

キーンコーンカーンコーン！

「あ、チャイムなったから戻るわ、じゃね」

そう言っつて鈴ちゃんは二組の教室に戻っていった

あの眼帯女……………学年別トーナメントで当たったら鈴ちゃんと同じくらいにボコボコにしてやる……………

「磨美りん教室行こーよ。行かないのなら……………」



むぎゅっ！ むぎゅっ！

「ああっん！」

「そしてそのまま……揉みながら引つ張る！」

「あああっ！やめてえ！」

朝の廊下に私の快感じみた声が響き渡った

「もうっ！サッチー酷いっ！」

「ごめんごめん、今度から気を付けるから」

「……胸って揉まれると刺激されて大きくなっちゃうんだよ。これ以上大きくなるとISスーツに収まりきらなくなっちゃうよ……」

実際、サッチーやあの先輩に胸を揉まれた数日後にISスーツを着たら、若干きつくなってたし。

「あ、それはそうと磨美りん。今度の学年別トーナメントなんだけど……」

サッチーが私の机に一枚の紙を置く

「？」

「今度の学年別トーナメントではね、タッグを組んでやるんだってだから……」

「私と組んでと……」

「その通り」

わかりやすい考えだ。

ま、双方にデメリットはないし、むしろメリットしかないし。

「いいよ。私にとっても好都合だし」

「ならここに書きこんでー！」

「わかったよ」

私はその紙に自分の名前を書き込み、サッチーに渡した

「ありがとう」

「いいよ、いいよ。私だって優勝したいし」

今回の学年別トーナメントは絶対に負けるわけにはいかない。

理由？ ほーちゃんが原因とだけ言っておこうかな

優勝に向けて頑張らましようかね！

## その日の夜

夜、私を恐怖させるには十分すぎるメールが届いた

内容は

『私だ。試作した2つの武器を試したい。明日、そっちに部下を引き連れて行くから、出迎え頼む。』

エミリオ・アズナブル』

.....

「「いやあああああ！」「」

あれ？今サツちーの声も聞こえたような気が.....

「磨美りんごーしよー！明日バカ兄貴がここに来るううう！」

「こつちもどーしよー！うちの技術者が明日来るううう！」  
二人してやんやんやんやと騒いでいた夜だった

仮面の五人！（前書き）

仮面、登場。

そしてサフィの兄貴登場

## 仮面の五人！

「……なぜ来る……！」

私は今、IS学園校門前にサッチーと一緒にいる。

今日は一番来てほしくない人が来るから私もサッチーもノリ気ではない

「……あ。来たかしらん」

「あれが磨美りんのISの技術者……？」

私達は視線の先にいる集団をみてそう言った

「……はあ」

「なぜため息をつく、仮面は外しているはずだが？」

赤い技術者は外しているけど……

「あなたの後ろ、仮面が二人！」

「……外せと言ったはずだが、アルフォンス、ロー」

「……やむを得ない、外しますよ。」

そう言ったのはロー・エーカー、日本文化にガッツリはまりすぎて、武道を極めた赤い技術者の部下。剣道でたしか五段とか言ってた

「フハハ！全く面白いよ、君は！」

「は、はあ……」

高笑いをするのはアルフォンス・ラウル。この人は若干気持ち悪いから関わりたくはなかった……

でも、ISの整備に関しては凄く詳しくて、ちょっとだけ教えてもらったことがある

「よう、子猫ちゃん」

「あ、お久しぶりです。ロイさん」

私が唯一まともな返事したのは、ロイ・フラガさん。この人はよく私の勉強の相手をしてくれて、あとチェスの相手をしてもらった事もあった。悪いところをあげると若干ナルシストなのだ。

「……ん？その白髪の子猫ちゃんは誰だい」

「あ、私はサファイ・マーキスです」

「……ん？マーキス？……もしや……」

「まったく、校門になぜこんなに男がいる！」

「……来たか……バカ兄貴」

サッチーがそう言って頭を抱える。

見ると男なのに腰まである長い髪をなびかせながら歩いてくる仮面が  
仮面!?

「その仮面、はずせええええ!」

刹那、サッチーがその仮面に踵落としを食らわせ、仮面にひびを入れた

「ぐあつ!」

「「「オオー!」」」

その光景にうちの技術者たちは歓声をあげていたが当の蹴られた本人は……

「……いいかげん痛いから会う度に蹴るのをやめてくれ、そんなことをしていたら彼氏ができなくなるぞ」

……あ、いま余計な事を言った

「Die!」

あつ!サッチーがキレた!

数分の間、サッチーはサッチーのお兄さんの体に蹴りを高速で放っていた

そうやっているとき、仮面が砕け、その素顔にまで蹴りが放たれる

しかしそれを止めたのは意外な人物だった

「……やめないか！」

なんと止めたのはうちの赤い技術者！

「あ、す、すいません……」

「全く、大丈夫か？レイモンド」

「ああ……、なんとか……それより、なぜ私の名前を……」

「忘れたのか？大学で同期だっただろうに。私だ、エミリオだ」

そう言って赤い技術者はサングラスを取り出した

「……！思い出したぞ！久しぶりだな！エミリア！」

「……？兄貴、この人知ってるの？」

「大学時代の旧友だ、まさかこんなところで会えるとはな」

そう言ったあと、レイモンドさんと赤い技術者は腰に手を当て、笑い始めた

「ハハハハッ！」

……友達に会えて嬉しいのはわかるけどいつになったら新装備渡してくれるんだろう

「おっと、すまない。新装備だな。そっちにデータを送る。あとは



自分でやれるな?」

「わかった」

ISのディスプレイに新装備の内容が表示される

サッチーに話しかけようとして、横を向くと、サッチーはレイモン  
ドさんと結構遠くにいた

サフイ s i d e

「……レイ兄、私のは」

「わかっている。そっちにデータを転送するから、少し待て」

「……ん、……ねえレイ兄」

私は意を決して、兄貴にある質問をした

「なんだ」

「……なんでアルティメット・システムを作ったの」

「……」

「……」

長い沈黙。

時間的には数分しかたつてないけど私には数十分以上に感じられた

「…………後悔はしている」

帰ってきた返事はそれだけだった

あえて磨美りんのISにアルティメット・システムが積まれていることは言わなかった

磨美りんには何か意図があつて、その意図を壊すのは嫌だから……

「…………話は終わりか」

「…………うん」

「…………そうだ、お前に一つ伝えたい事がある。重要な事だから一字一句たりとも聞き逃すなよ」

「なに」

「近頃ISを強奪する集団がいると言う話だ。この前、スペインで作られたIS三機が強奪された。名前までは詳しく聞いていないが気を付けるんだな。盗られるほつも盗られる方だが」

「ん、わかった」

「それと、しばらく日本に滞在する」

「はいはい…………はい！？」

「悪いか、お前の活躍を私はみたいんだがな？」

「勝手にしなさいよ！バーカ！」

「なっ！？バカとはなんだバカとは！」

「そのままの意味だバーカ！」

「少なくともお前より私は賢いはずだ！馬鹿者！」

「うっさいバーカ！」

この後、しばらくバカの言い合いがしばらく続いた

「ところで、アーデルハイトくん」

「なに」

いきなり赤い技術者が声をかけてきた

「もうすぐ学年別トーナメントらしいな？」

「そーだけど？」

「開発者として私はその活躍をみたいのだが、何分時間がない。そのため代わりの者を送る、というより置いていく」

「はいはい、で誰なの」

「ローをここに置いていく。前に言っていた侍少女にでも会わせてみるといい」

侍少女「ほーちゃんの事だ」

「ん、りょーかい。でもあの人、どこに泊まるの?」

「日本の友人の家に居候すると言っていた、だから問題はないはずだ」

「わかった、でも学年別トーナメントに来るときは仮面を外しておけって言うといいてよ?」

「熟知している!そんなことは!」

遠くからローさんの声が聞こえた

「ならいいや」

「では私達は帰る」

「はいはい」

そう言って赤い技術者達(ロー・エーカー除く)は帰っていった

「さて、帰る」待ちたまえ、少女!」……やめてよその呼び方」

「すまない。報告をしておきたいことがあってだな」

「なに？手短にお願いね」

「わかった、わかった。先日、スペインにて三機のISが強奪される事件が起きた。強奪されたISの名は不明だが、装甲材に特殊な金属を用いているらしい。少女の事だから起こり得ないかもしれないが君も気をつけたまえ、下手をすれば重傷を負うことになるぞ。

ISは

「

「あくまで兵器なんですよ？」

「熟知しているようだな」

「散々言われたから覚えてるわよ」

「なら私は友人の家に泊まりに行く。学年別トーナメント、しっかりやれよ」

「はいはい」

そう言ってローさんはIS学園の校門から立ち去っていった

仮面の五人！（後書き）

キャラモデル

アルフォンス⇨ラウ・ル・クルーゼ

ロー・エーカー⇨グラハム・エーカー

ロイ・フラガ⇨ムウ・ラ・フラガ（種<sub>デス</sub>の）

レイモンド・マーキス⇨ゼクス・マーキス

てな感じです

## 学年別トーナメント、開幕！

学年別トーナメントの試合前、私は

「あり〜？ま〜みんないつもとISスーツが違うねえ〜？」

そう言いながら近づいて来たのはのほほんさんだった

「うん、さすがに今日みたいな公の場だといつものやつ（上下が別れてTバックのやつ）来てたら恥ずかしいしね」

「とは言いつつも、お尻が丸出しに近いよ？」

近づいて来たサッチーが私のお尻を揉みながら言う

「あんっ！ちよ、まって！」

「きこえな〜い！」

「レイモンドさんに言いつけるよ！」

「それだけはやめて」

これは昨日レイモンドさんから教えてもらったサッチーが百合っぽい事をしたときの対処法。

サッチーはレイモンドさんに頭が上がりなく、それが唯一の弱みなのだ

「あ、組み合わせ決まったみたいだよ」

誰かがそう言ったから私はディスプレイを見た

「最初の相手は……一夏くんとシャルルくんか」

「織斑君、シャルルくんは強敵だね。特に織斑君の零落白夜は……かするだけでも致命的なダメージになるからなあ。ま、当たらないらなければどうと言う事はないんだけど」

「確かにね。じゃっ、サッチー時間がないからハッチに行こっ！」

「はいはい。頑張りましょうかね！」

急ぎ足で私とサッチーはハッチに向かっていった

「……きたきた、一夏くん」

「あれ？今日はISSスーツ違うんだな？」

「うん、さすがに大勢の人の前であのISSスーツは着たくないしね」

ただでさえ露出が多いのに下乳がはみ出てるんだもん。



恥ずかしくて仕方がないよ

「さて、始めよっか」

「ああ」

「容赦はしないからね、アーデルハイトさん、マーキスさん」

「それはこっちも同じだよ。」

サッチーが二人に向かってそう言つと試合開始まで五秒を切っていた

「一夏くん！本気で行くから！」

「ああ来い！磨美！」

ビイイイイ！

試合開始の合図が鳴り響いた

「」「食らえ！！」「」

私はミサイルコンテナを展開、サッチーはダブルガトリングガンを展開して、一夏くんに向かってミサイルと実弾を発射した

「やらせない！」

一夏くんの盾になるようにシャルルくんが間に入る

シャルルくんはシールドで一夏くんを守りながらマシンガンでミサ

イルを迎撃している

「甘いね」

そう言つてサッチーが私の後ろから出てくる

「ドーバーガン！」

そう言つてサッチーはドーバーガンを展開して、シャルルくんの盾に狙いを定めた

「食らえ！」

ドーバーガンからビームが放たれる。

「盾に当ててどうするつもりかなっ！」

シャルルくんは盾でそのビームからのダメージを防いだ

「もう一発！」

今度は一夏くんの方向にドーバーガンを向けた

「ビームなら零落白夜で相殺すれば！」

確かに、一夏くんの零落白夜のエネルギー質の物を無効化させる能力は驚異だ

「残念！これ、実弾も撃てるのよね！」

サッチーのドーバーガンが実弾を発射した。

「なっ！？聞いてねえぞ！」

一夏くんはビームが来ると思っていたらしくて、モロにドーバーガンの弾を食らって、ダメージを受けたようだった

「一夏っ！……くっ！」

シャルルくんはマシンガンを両手持ちして、サッチーに向かって撃った

「甘いよ！二人とも！」

ズギユウウウン！

ズギユウウウン！

二発のビームが一夏くんとシャルルくんに向かって放たれる

「しまった！磨美がいたんだっ！」

一夏くんは刀でエネルギーを相殺

シャルルくんは盾で防御行動を取った

「それじゃだめだよ！シャルルくん」

そう言った時、ビームがシャルルくんの盾に当たって、突き抜けた

「え……！？シールドを貫通した！？うわあっ！」

この装備はこの前、赤い技術者に貰った新装備、ビームマグナム。

一発の弾の威力はツインバスターライフルより劣るけど、かするだけでも致命的なダメージに繋がるといって何とも恐ろしい武装だ

ビームに使うエネルギーはカートリッジに充填されていてシールド・エネルギーを消費しないのが最大の利点だ

ただ、そのカートリッジの数が15個しかなくて、あまり多用出来ないのだ

「……一発でかなりシールド・エネルギーが削られた……侮れない！」

「本気で来てよ。シャルルくん」

「言われなくても！」

シャルルくんはマシンガンを両手持ちして私から距離を取りながら弾を撃ちまくる

「甘いつ！」

私は腕の装甲に展開したブレードブーメランを装着、それを高速回転させ、ディフェンスロットにして弾を弾いた

ただ弾ききれなかった

「くっ……なら近接戦で！」

シャルルくんは近接ブレード、『ブレット・スライサー』を展開、わたしに接近してきた

「これならっ！」

「いいねっ！シャルルくん」

私はバックステップでその緊急回避。

ただ足の装甲にブレードが当たって若干シールド・エネルギーが減少した

「当たった！」

「あらら、当たっちゃった。……でもこれなら外さない」

私はツインバスターライフルを展開、さらに肩のビームキャノンを展開、さらに全てのビットの砲口をシャルルくんに向け、放った

「ビームテンペスタ！」

説明しよう！

ビームテンペスタとは私のIS、ネーブ・テンペスタの全ての射撃武装からビームを放ち相手のシールド・エネルギーを、確実に減らすというもの

山田先生のとくにも似た技を使ったけどあれは未完成で何発か外し

てしまっていた

ビームを放ち終わった時、そこにはシャルルくんがまだ立っていた

「……まだ……！終わらないよ！」

「じゃあ次で終わらせよっか」

私はビームマグナムを手に持ち、シャルルくんに向かって放った

「わあっ！」

シャルルくんはその攻撃をモロにくらい、行動不能になった

「さーて、あとは一夏くんか！」

私が一夏くんのいる方向を向くと、一夏くんは意外とサッチーに肉薄していた。

サッチーはヒートショーターで防御をしてるけど、一夏くんが雪片を降り下ろすと、片方のヒートショーターが斬られた

「サッチー！援護するよ！」

私は一夏くんに突進し、零距离でマシンキャノンを連射。

案の定、全ての弾が一夏くんに当たった。

「磨美！？シャルルがやられたのか！」

「その通り。あと一夏くん。ちゃんと前を見て」

「え?」

「隙あり!」

サッチーがビームソードで一夏くんに向かって突きを放つ。

「おわっ!」

「逃げさせないよー!」

私は一夏くんを羽交い締めにして、一夏くんの動きを止める

「これでおしまいよ!」

サッチーのビームソードが一夏くんの白式の装甲にあたる。

それから数秒、試合終了を知らせるブザーが鳴り響いた

黒ウサギと侍少女はなんか強そう（前書き）

どうも、この前ガンプラのユニコーンガンダムを黒く染め上げた作者です

あとで知ったんですけどユニコーンガンダムって黒いやつもあるらしいですね、角の形が若干違っらしいんですけど

見てみたいなあ……

映画の方のユニコーンも地球に舞台を移したし……



黒ウサギと侍少女はなんか強そう

「サツチーサツチー！」

「はいはい！」

「「イエイ！」」

ハッチに戻ったあと私はサツチーとハイタッチをしていた

「勝てたね、サツチー」

「うん、この調子でつぎも　　「貴様っ……！」……バトルジャン  
キーが来たか」

サツチーがそう言ったら後ろから、あの女がやって来た。

「貴様達は私の邪魔をした……」

「一夏くんを叩きのめす野望の邪魔なら誰でもするはずだよ。特に  
一夏くんに好意を寄せている私達なんかはね……そうでしょ？ほー  
ちゃん」

私はクス（ラウラ）の後ろにいたほーちゃんに声をかけた

「……急に振られても困るんだが」

「ありり？ごめんね」

「まあいい……ISを兵器とってない奴に私が負ける筈がない。

覚悟しておけ」

そう言つてISを展開したクス（ラウラ）はアリーナに飛び出して行つた

……さすがにクスは言い過ぎか。

「磨美りん、ジュース買いにいこ」

「え、ああ、うん」

サッチーに誘われて私はジュースを買いに行つた

「あゝ、生き返る〜」

「そうだね〜」

「んつと!」

サッチーうつ伏せになつて自分の胸元にペットボトルを挟んで椅子に寝転がつた

「話変えるけどさ、磨美りん、AICの弱点知りたくない?」

「あるなら知りたいよ」

「じゃあ教え上げるけど、条件付きね」

「条件？」

「今度さ、ゲーセンでいろいろとはしゃぎたいから一緒に行くのが条件？OK？」

「べつにそれぐらいのことなら構わないよ？」

「ありがとう」

「さて、そろそろ待機室に戻りましょうかね？」

「うん、そうしょ」

「あー……こりゃすぐに私達出るはめになりそうだね」

「……うん、そうみたいだね」

私はディスプレイを見てそう言った。

なぜなら、あのカス（ラウラ）とほーちゃん（篤）が圧倒的な強さで、相手チームを追い詰めているのだから。

「……サッチー。私アルティメット・システム使つかもしれない」

そう言ったときサッチーが横からデコピンを放ってきた

「痛っ！」

「……レイ兄の前でそのシステムは使わないで、あの人だって目の前で自分の作ったシステムで人が倒れるのは見たくないはずだし」

最近、サッチーはレイモンドさんの事が家族として好きなんじゃないかと思う今日この頃

「……でも」

「それに、織斑君が泣くよ？」

そう言われたとき、私の中で泣いている一夏くんの顔がなぜか見えた。

……泣かせたくない。私は泣いてばかりいた私を救ってくれた一夏くんに笑顔でいて欲しい……

「わかったよ、サッチー。アルティメット・システムは使わない」

「うん、ありがとう。……さて、ハッチに行くよ！」

「えっ、ああうん！」

改めてモニターを見るとカスとほーちゃんが相手チームを下していた。

それを見て、私は待機室から出てハッチに向かった

さあ、次は私達があなた達の相手よ……ラウラ・ボーデヴィッヒ、  
ほーちゃん？

天使と黒兎の激突（前書き）

なんか久しぶりの更新

## 天使と黒兎の激突

□ I s i d e

はじめましてだな！

私は、ロー・エーカー、イタリアIS開発技術局でISの開発をしている

今回、私は我が国の代表候補生、磨美・アーデルハイトのIS、『ネーブ・テンペスタ』のデータをとるように、エミリア（赤い技術者）から頼まれたのだ

さらに私は運がいい！

磨美・アーデルハイトくんの相手が、第三世代兵器を装備した、ドイツのISだ！

なんとという僥倖！生き恥を晒したかいたあったというもの！

「……逢いたかったぞ、ドイツの第三世代！」

私は小声でそう言い、グラウンドを見つめた

アリーナハッチにて

「さあて、行きますか」

サッチーがISを展開して、「ん？どしたのサッチー？」

「兄貴見つけた。仮面つけてないからよかったけど」

「レイモンドさんやっぱり来てるんだ。まあ……私も私関係の人を見つけちゃったけど」

「見つけたけど？」

「仮面つけてる……」

あれだけつけるなって言ってたのに！

「ハハハッ！それは恥ずかしいね！」

「ほんとだよ……ま、その話は置いて……」

「そーね……じゃっ、私、先に出るから」

そう言つてサッチーはハッチから飛び出していった

「私も行くか」

私もアリーナのハッチから飛び出した

そこで待っていたのは、先に出ていたサッチーとラウラ・ボーデヴ  
イツヒとほーちゃんだった

「来たようだな……」



「……あなたを叩き潰さないことには、私の気がすまないからね」

「フ、よく言う……この前私に挑み、自爆した人間の言う言葉とは思えんな」

「……今日はあの時みたいにはいかないよ」

試合開始まで五秒前。

「さて……ラウラ・ボーデヴィツヒ！私は貴方を」

「私の邪魔をした貴様らを！」

「叩き潰す！」

ビイイイイ！

試合開始のブザーが鳴り響いた！

私はビームマグナムを展開し、ボーデヴィツヒさんに向かって放った

「無駄だ！」

私の放ったビームはかわされ、地面に大きなクレーターを作った

「チッ！外した！もう一発！」

私はビームマグナムの銃口を向け、ビームを放った

「どうわぁー！」

「なっ！？なんだこのビームは！」

私はさっきボーデヴィツヒさんに向けて撃ってはいない。

一か八かの賭け、サッチーと交戦状態にあるほーちゃんの方に向けてビームを放った。

「磨美りん！危ないから何も言わずにビームを撃つのやめて！」

「ごめんごめん！」

「隙だらけだ！」

サッチーに詫びた瞬間私の腕にワイヤーが絡み付いた

「あ………！」

「戦闘に集中しないと！責様、私を侮辱するのか！」

ワイヤーブレードが、私のISのシールドエネルギーを削る

「……くうっ！サッチー！ヘルプ！」

「待って！私も手が離せないから少しこらえて！」

サッチーに救援を頼んだがあちらも援護に行くのは難しいらしい

まあ相手が色んな剣術を持っててそれを巧みに使いこなせるほーちやんだから仕方ない事と言えば仕方ない事かもしれない。

「はっ！」

「きゃああー！」

私はボーデヴィツヒさんにワイヤーブレードで振り回され、アリーナの壁にぶつかった

「ぐう………！」

アルティメット・システムを使えば私はこのワイヤーブレードを強引にでも引きちぎることかできるけど、私はサッチーと約束したから使いたくない。

「どうした！私を叩き潰すのではないのか！」

「叩き潰すわよ………！」

「ならやって見せる！」

私はワイヤーブレードで今度は地面を引きずられながら吹っ飛ばされた

「がはっ………！」

地面を引きずられたせいで、ISスーツが若干裂けてしまった。

「シールドエネルギーがっ………！」

シールドエネルギーを確認すると、かなり減らされていて106まで減っていた。

「……でもまだ打つ手はある！」

私はビームマグナムのエネルギーパックをISに繋ぎ、シールドエネルギーを回復させた

106まで減らされていたシールドエネルギーが306まで回復した

「ほう……なかなか準備がいいではないか」

「お褒めの言葉ありがとう……サッチー。そっちはどう」

「なんとかかなりそう！」

サッチーはビームソードとヒートロッドを巧みに使い、ほーちゃんを追い詰めていた

どんな感じかと言うとまずビームソードでほーちゃんを斬りつけそこでうまれた隙をつき、ヒートロッドでほーちゃん拘束したあと、ガトリングガンで確実にシールドエネルギーを減らしていった

「さて……私もかくし球をだしますか」

かくし球とは赤い技術者にもらった新装備のことだ

「……偏向ビーム砲、展開」

そう言うと私の前に巨大なキャノン砲が展開された

「……………！」

「私をなめないでね。ラウラ・ボーデヴィツヒ」

私はそう言ったあと、大出力のビームをラウラ・ボーデヴィツヒに向かって放った

「当たらなければ！」

ラウラ・ボーデヴィツヒはそのビームを避けた

「あちゃー……………外したか」

「ハハハ！かくし球がその程度とはな！」

「なんていうと思った？」

「なに？」

ラウラ・ボーデヴィツヒが疑問の表情を見せる

刹那、ラウラ・ボーデヴィツヒの背中にビームが直撃した

「があっ！」

「……………油断しすぎよ、黒ウサギちゃん」

「なぜだ！なぜさっきのビームが！」

パニックってるみたいだから教えてあげよう

「……このビーム砲の正式名称は、偏向収束エネルギー砲。名前でわからない?」

「曲がるビームかっ……!」

「ピンポーン、で、どう?結構効いたでしょ」

「教えるものかっ……ぐうっ!」

おお、あっちはかなりガタが来てるみたいだ

流石はうちの天才技術者、エミリア・アズナブルが作るだけのこと  
はある

「さて、今ならやられかたの選択をさせたい。ISのダメージレ  
ベルがDになるまでボコボコにされるか、それともあっさりビーム  
マグナムでやられるか、どっちがいい?」

「どちらも断る!」

「あっそ」

「磨美りん、こっちは終わったよ!」

サッチーが私のとなりにやって来た

ほーちゃんの方を見れば刀を地面に突き刺し、立て膝の状態で悔し

がるほーちゃんがいた

「サッチー、あの娘どうする？大火力で滅殺かじわりじわりと痛め付けて倒すか」

「大火力の方で。私の鬼札を見せつける絶好の機会だからね」

「鬼札？」

「そ、鬼札。私のISの攻撃の中で一番火力があるの。ソーラーキヤノン！」

サッチーの両肩にキヤノン砲が展開された。

それに伴い、サッチーのISの背中に、金色のプレートが六枚展開された。

「へえ、すごそうだね。でも私のISのもすごいんだからね」

「磨美りんのビーム全弾発射は威力すごそうだもんね」

「ありがと、じゃあ……とどめと行きますか」

私はライフルビットを展開、更に肩のビームキヤノンを展開し、腹部のビーム砲と偏向ビーム砲を連結し構えた。

「……ソーラーキヤノン！発射！」

「ビームテンペスタ！」

私達が放ったビームは、全てラウラ・ボーデヴィツヒに当たり、確  
実にあいつのシールドエネルギーをゼロにした。

そして私がハッチに戻ろうとしたとき、緊急事態を知らせるアラ  
ームが鳴り響いた



## ニセモノ

「あああああー!!」

「!?!」

突然、響いたラウラ・ボーデヴィツヒの絶叫。

それに私は反応し、後ろを向くとラウラ・ボーデヴィツヒのIS、シュヴァルツエア・レーゲンの装甲がグニヤリと変型……いや、変型なんてものじゃない。変質していた

「何あれ……………」

シュヴァルツエア・レーゲンは……否、シュヴァルツエア・レーゲンだったものは徐々に形を形成していった

□ Inside

「あれはっ……………!?!失礼!拝借する!」

私は偶々双眼鏡を持っていたとなりの男から強引に借り、仮面を外した後黒く歪んだISを覗いた

「なっ、なにをする!」

「失礼と言った。……………間違いない……………!」

(確実にあれはVTシステムだ!まずいぞ、このままではここに被

害が及ぶかもしれん！)

「逃げてください！このままでは私達に危害が及びます！」

「それを言える根拠を聞かせていただきたいな、ロー・エーカー」

「貴方は……！」

私が隣を向くとそこにはレイモンド・マーキスが腕組みをしながら鋭い目線であの黒い歪みを見ていた

「あれはVTシステム、正式名称、ヴァルキリートレースシステム。あれは名前の通り過去のモンドグロツソ受賞者、ヴァルキリーのデータをトレースし、行動、動きの癖、ありとあらゆるところまで再現するものだ。現在、VTシステムは条約上、使用禁止になっているのだが………」

「見事な説明だな、ロー・エーカー、ただそれだけでは避難す

！？」

「……………」

私はレイモンド・マーキスにあることを書いた紙を見せた。

直後、レイモンド・マーキスは立ち上がり、こう言った

「私が先導するので直ちにここから避難しろ！ここに危害が及ぶ可能性がないとは言い切れん！」

「……………フ、シスコンめ」

私はレイモンド・マークスに見せた紙をもう一度みた。

そこに書いていたのは

『あなたの妹さんに危険が迫っています。あなたの妹さんを守るために力を貸していただきたい』

まあ、協力してもらえらなら構わんのだがな

「何よこれっ！」

刀を握ったシュヴァルツエア・レーゲンだったものはいきなり私に急接近、居合いを放ってきた

「わっつと！」

「磨美りん！」

私はギリギリのところその居合いをかわし、デスサイズを構えたのだが

ガキンッ！

「嘘……！？」

デスサイズの柄が真っ二つに切られてしまった

そこから敵の猛攻が始まった。

肩のビームキャノンを撃とうとしてもチャージまでの時間に攻撃されて破壊されるのがオチ

ライフルビットも展開したけど、全て避けられ、破壊された

ビームマグナムはエネルギーパックを切らしてしまったから使えない……

ほぼ全ての武装が使用できなくなってしまった

私は敵の前に、丸裸にされてしまったのだ

「……！どうしたら勝てるの!？」

どうしたら良いかわからなくなりパニック状態に陥ってしまった

### □ i s i d e

「ロー・エーカー、君のところの代表候補生、追い詰められているぞ」

「なにっ!？」

私はレイモンド・マーキスの言葉に驚き、私は決心した

エミリアから渡されていた、この歪みきつた世界を元に戻す力を使う

「……参るぞ！スサノオ！」

そう言ったとき私の仮面から装甲が展開された

黒く、そして鎧武者を連想させるようなフォルム。

これは、エミリアがISコアを研究し、それに近いもの、つまりは疑似ISコアを作り上げたのだ

「それはISか？」

隣でレイモンド・マーキスがそう言った

「ISに近づけたものだと言うことだけ教えておこつ……ぜえええりゃっ！」

私は手に黒いブレードを展開し、アリーナバリアに向かって突きを放った

アリーナバリアは裂かれ、進入出来るだけの隙間ができた

私はそこから進入し、アーデルハイト君とレイモンド・マーキスの妹さん（名前を知らんだ！）の援護に向かった

「どきたまえ！アーデルハイト君！」

「その声、ローさん!？」

私は言われた通り退くと、さっきまで私のいたところに赤い光球が飛んできた

「磨美りん何あれ！？あの黒い侍みたいなISはっ！」

「知らないよあんなの！」

「これがなんなのかはあとで説明する！今はあのVTシステムを止める！」

「待ってくれ！」

……！この声、一夏くん！？

声が出た方向を向くとISを腕だけ展開した一夏くんが立っていた

なに馬鹿なことしてるのよ……一夏くんは……！

私は一夏くんのもとに駆け寄った

「一夏くん何でいるの！？死んじゃうかもしれないのに！」

「どけよ磨美！」

一夏くんが私を押し退けようと必死になってるけど私は退く気なんてさらさらない。

「磨美！頼むから退いてくれっ！」

「嫌！なんで退かなくちゃいけないの！」

「そいつが気に食わねえからだよ！アレは千冬姉のデータだ、それは千冬姉だけのものなんだよ！」

「だからってそんなわがままはっ！それに一夏くんにあれをやっつけることができるの！？織斑先生の強さはわかってるはずでしょ！？それでもやれるの！？」

「ああ、やってやる！あのISも、そんなよくわかんねえもんに振り回されてるラウラも、一発ぶん殴らないと気がすまねえ！」

「少年っ！いい加減にせんかっ！」

V Tシステムの振り下ろした刀とローさんの刀がこぜりあいをして  
いる時にローさんがそう言った

「少年の馬鹿馬鹿しい考えを聞いているとこっちは異様なまでにムカついてくる！何故このV Tシステムを止めようとするのだ！」

ローさんが一夏くんに怒鳴った。

「どこの誰か知らないけど、これは俺がやらなきゃいけないんじゃないかって、俺がやりたいからやるんです！」

「……ハア、勝手にせよ！私はもう知らん！確信をもって言える！君のようなISを兵器だと思っていない者はいずれ酷い目に遭う！」

ローさんは一夏くんに呆れたみたいだ

「……やってもいいんですね」

「勝手にしろと言っている!」

ローさんは武器を捨てて、装甲を解除した。

「だが敢えて言わせてもらおう……死ぬなよ……!」

「一夏っ!」

ほーちゃんが一夏くんに向かって叫ぶ

「絶対……!絶対戻ってこい!」

「ああ!」

「アーデルハイト君!破壊されたISの武装をもう一度装備し直す!ついて来たまえ!」

「はい」

私は一夏くんの事を心配しながらローさんについていった

「サファイ!お前もこっちに来い!ミサイルと銃弾、エネルギーの補給をしてやる!」

「レイ兄!……わかった。織斑くん、磨美りんのために必ず成功させなさいよ」

「わかってる」



サッチーも私と一緒にやって来た

「磨美りん、織斑くんやれると思う？」

「わかんない……。ただ一夏くんは土壇場でありえないぐらいの力を発揮するから……」

「やるさ……あの少年なら」

「ローさん？」

「あの少年なら、やれるはずだ。どことなくそんな気がするのだ」

べつやらローさんは一夏くんに呆れたわけではなさそうだ

「……ローさんまだ終わらないの？」

「せつかちだな。もう少しで終わる。」

「そ、終わったら一夏くんの援護にいくから」

「フ、心配しているのか？」

「そりゃね……」

「まあ、勝手にしたまえ。しかし困ったな……」

「さっきのローさんが使ってた黒いISのこと？」

「ああ、あれを使ったせいで私はただでは帰らせてもらえそうにな

い……。尋問を受けなくてはいかん」

「なんならIS学園専属の技術者になれば？」

「それも考えているがエミリアにどうやって言い訳を考えなければいけない……」

ローさん……ガチで悩んでるみたいだなあ

「できたぞ。援護だろうがなんだろうが勝手に行くがいい」

「ありがとう、ローさん。……でもその必要はな」んなわけねえだろうがあああ！」「！？」

突然響き渡った怒鳴り声に私とサッチー、ラウラさんを助けたばかりの夏くんが目を見開いた。

二セモノ(後書き)

次回、薬中トリオ登場

## 三人の亡霊

「一夏くん！ラウラさんを連れて早く逃げて！」

私は一夏くんに向かって叫び、逃げるように促した

「わかった！」

「ギャハハハ！させつかよお！滅殺！」

「しつかりやれよポケナス！」

「ポケナスはテメーだろうが！」

一夏くんに向かってフルスキンの黒い飛行機のようなISが青いISを乗せて向かっていく

「させるものですか！」

私はISを展開し、青いISを蹴り飛ばした。

「ごふあ！てんめえ……！だがなあ、このカラミティのTP装甲の前では物理攻撃なんざ無駄無駄あ！」

『アーデルハイト君！あの三機はスペインから奪われたISだ！できることなら鹵獲しろ！』

「了解しました。織斑先生、そう言う事らしいのであの三機を撃破、もしくは鹵獲します」

『わかった。くれぐれも負傷だけはしてくれるなよ』

「了解です。……………さて、やりあいましょう、IS泥棒さん？」

私はビームデスサイズを展開し、青いIS、カラミティに向かっていった

「あめえんだよ！オラオラくらいな！」

ズギユウウウン！

カラミティの胸から大出力のビームが放たれてきた

「無駄よ！」

私はそれをかわし、カラミティの背中に回り込み、デスサイズの刃をカラミティの首に潜り込ませた

「ククク、何が無駄だつてえ！？」

「黙りなさ」

ズギユウウウン！

「きゃあああつ！？」

「……………つたく、なんであந்தの尻拭いなんかしなきゃいけないのよ。馬鹿馬鹿しい」

「んだとお！？」

「助けてやったんだからちったあ感謝しやがれって言ってんだよテ  
メー！」

「だああもう！うっさいわね！あんたら二人、絶対しやべるな！」

「うっせえ！」

「……喧嘩なんてしてていいのかな？」

「「「ああん！？」「ってやば」

私はツインバスターライフルを発射した。

「！！」

見事に三人組はビームをくらい、アリーナの壁を突き抜け、どこかに飛んでった

「あー、やっちゃった。鹵獲しろって言われてたのに」

「磨美りんずるいよ。ご馳走はとっといってもらわなきゃ」

「ごめんねサッチー。でも案外早く片付いちゃった」

「まあいつか」

そう言って私とサッチーはアリーナから出て、私だけ織斑先生の説教をくらいにいった

### 三人の亡霊（後書き）

後日談。

ロー「……ああ、エミリアか？しばらくそっちに帰れそうにない」

エミリア『なぜだ？まさか疑似ISを使ったのか？』

ロー「相変わらず勘がいいな。その通りだ。IS学園の専属の技術者にさせられた」

エミリア『……わかった。あ、あとアーデルハイト君のデータを送ってくれ。あれがないと私とて困る』

ロー「先刻承知だ。いまからそっちに送る」

エミリア『わかった。まあそっちでも頑張ってやってくれ。私は二機目の疑似ISを作りたいのでな。電話を切らせてもらう』

ロー「ああ」

こうして、私ロー・エーカーはIS学園専属の技術者になった

新しい先生がやってきた！（前書き）

久しぶりの予約更新！

やったーこれで三巻に入れる！



新しい先生がやってきた！

「み、みなさん、おはようございます……」

ふらっ、ふらっ、としながら教室に入ってきた山田先生。なんだかとっても眠たそうだ。大丈夫かなあ

「織斑君、何を考えているのかはわかりませんが、私を子ども扱いしようとしてるのはわかりますよ。先生、怒ります。はあ……」

いや、山田先生、その状態で言われても全く説得力がないんだけど。

「今日は、ですね……皆さんに転校生と新しく赴任してきた先生を紹介します。でも転校生といいますが、すでに紹介は済んでいるとありますが、ええと……」

あれ？そう言えばシャルルくんがいないなあ？風邪でも引いたのかな？

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

この声は まさかシャルルくん！？

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしく願います」

ペコッと頭を下げたシャルロット？さんに私はとりあえずみたいな

感じて頭を下げた

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということですよ。はあ……また寮の部屋割りを組み立てなおす作業が始まります……」  
ここまで来てやっとみんなが気がついてきた

「え？ デュノア君って女……？」

「おかしいと思った！ 美少年じゃなくて美少女だったってワケね」

「って、織斑君、同室だから知らないってことは」

「ちょっと待って！ 昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！」

……！ 何っ!？

仮に、仮にね！前にいるシャルロットさんがシャルルくんなら……

あああああっ！

一夏くんが私以外の人と一緒にお風呂入っちゃったああああ！

「磨美りん？どうしたの？凄く汗かいてるけど？」

「ななななんでもないよ？さささささサッチー？」

「いや何かあるでしょ？」

「……バレた？」

「うん」

サッチーはなんだか冷静だ

ドカアアアアン！

「何とおっ!？」

突然教室のドアが吹き飛び、吹っ飛ばされた一人の男の人……ローさんとISを纏った鈴ちゃんが登場してきた

「一夏あっ!!!！」

「待て！君は人殺しになりたいのか！」

黒いIS擬きを解除したローさんが説得するも全く聞こえてない様子

「死ね!!!！」

「一夏くんっ！」

私は席から立ち上がり、一夏くんのもとに走り出した。

ただど間に合いそうにない！

明日の新聞の一面を一夏くんが飾るのだけはごめんだよ！

ズドドドドオンッ！



「……………あ……………でもいつか。一夏くんを助けてもらったお礼で」  
それにファーストキスは奪ってるしね。

クラス中が固まるなか鈴ちゃんが動いた。

「あ、あ、あ……………アンタねえええっ!!！」

鈴ちゃんが衝撃砲を再展開!

「一夏さん、どこにお出かけになるんですか？私、いそいで話さなければならぬことがあります、ええ、急を要しますの。ホホホホ……………」

オルコツちまで動き出した!

「一夏って他の女の子の前でキスしちゃうんだね。僕、びっくりしちゃったよ」

さらに今度はシャルロットさんがパイルバンカーを展開していた!

「一夏あ!!！」

「一夏さあん!!！」

「一夏!!！」

「……………覚悟っ!!！」

ISを展開していたラウラさん以外の三人が一夏くんに襲いかかる!

「いい加減にしないかあああああ！」

教室に響き渡ったローさんの怒号は専用機持ちの動きを止めた。

「まずはその赤い衝撃砲を装備したISのパイロット！人が密集しているなかでそんなものを発射するなど言語道断！」

「な、なによ！」

「次に蒼色のISを展開したパイロット！君も同類だ！」

「なんですって！」

「最後にオレンジ色のISを装備したパイロット！君は人殺しになりたいのか！」

「す、すいませんでした！」

「全く！君たちは代表候補生なりの礼儀を知らんのか！君たちさっさと教室に戻れ！席につけ！」

ローさんが激怒したことで鈴ちゃんは二組に帰り、オルコッチとシヤルロットさんはISをしまい席についた

「それでいい」

「騒ぎの鎮圧感謝する。ロー先生」

「いえいえ、私は兵器を何の躊躇いもなく振り回す者を許しておけ

ないだけです。織斑先生」

「あのロー先生。自己紹介を……」

「ああすまない山田先生。初めましてだな！私はロー・エーカー。ISの存在に心惹かれた男だ！」

「……………」

ローさんは多分心の中で『きまった！』と思っているだろう

スパアン！

織斑先生の出席簿アタックがローさんに直撃した

「ロー先生、まともな自己紹介をしてください」

「すまない、冗談が過ぎました織斑先生。改めて私はロー・エーカーだ。新しくこの学園に赴任してきた。主に技術科クラスの授業を担当するため君たちと顔を会わせるのは少ないと思うがこれからよろしく頼む」

「ロー先生はイタリアでISの技術者をしていた。だが彼はそれだけでなく、IS……を使用できるので本国からIS学園の技術顧問になっていただいた」

ロー先生がお辞儀した後、織斑先生が補足する

「か……………」

「……！耳をふさいで！」

「「「「「「かあっこいい〜〜〜！」「」「」「」

「何とっ！？」

「大人の色気がすごいよー！」

「顔の傷がかっこいい！」

「ダメっ！直視できない！」

「私にISを開発してー！」

「もしくは私を開発してー！」

「一番最後に凄い発言が飛んできた！」

「誰が言ったんだろう？後で聞いて回ろっつと。」

「今日も楽しい日になりそうだ！」



新しい先生がやってきた！（後書き）

三巻の話はかなりエロチックになるぜ！

さらに衝撃の事実も明らかにつ！？

磨美と一夏の関係は如何につ！

次回は反動でかなりエロくなります！

ライバルが増えたけど、私は私なりに一夏くんにアプローチするだけ！（前書き

もうすぐ1月1日ですねえ。

今年最後の更新です

ライバルが増えたけど、私は私なりに一夏くんにアプローチするだけ！

一夏 side

「ん……………」

朝の日差しもかなり暑くなってきた。だが俺はまだ起きる気はない

(後五分、後…………五分だけ…)

朝のまどろみタイムは俺が二番目に愛してやまないものだ

一番目？そりゃ…………なあ？察してくれ。

むにゅつ。

(…………?)

むにゅむにゅつ。

俺が手を伸ばすと手に、なにか柔らかい物が当たった

(はて、この感触はなんだ？…………こんなすべすべしてて、やわらかで揉みごたえがある物体、布団の中にあっただけ?)

まあいいか。今はこの至福の時間を満喫せねば

だがこっちの気持ちいいのも捨てがたい



「……………んっ……………！ん〜！もう朝なんだ」

「ば、バカ！隠せ！二人とも！」

はあ……………この前からこんなことばかりだ。

初めはなかが険悪だったこの二人なんだがオツドアイという共通点を知ってから、仲が良く、お互いに模擬戦を毎日しあっている

それだけでは飽きたらなかつたのか昨日は俺が入浴中に二人して入ってきたし。

「ふふふ、隠せって言われたら隠したくなくなるものなんだよ？—  
夏くん。」

「右に同じだ。それにおかしな事を言う。夫婦とは包み隠さぬものだ  
と聞いたぞ？」

「それは心の面でだ！いちいち脱がなくていい！」

「断る」

「私も」

そこからのラウラと磨美の行動は早かった。

「お前はもう少し組技の訓練をすべきだな」

「し、しかし、そうだな……………。寝技の訓練をしたいというのなら、  
私が相手になってやらないでもないが……………」

「あっ！こら、ラウラさんたら私のセリフ！」

「ば、バカ！女の子がそんなのと口にすんなって！」

「ほう。お前の口から言いたいのだな？よかるづ。こいつ」

「一夏くんたらエッチいんだから。ふふふ、きてもいいよ？」

「だーっ！そう言うことじゃねえっつの！」

この二人……なんか似てる……（泣）

だれか……！ たすけてくれ……！

「一夏、私だ、朝稽古を始めるぞっ？」

！ 救いの女神が……現れなかったか。

箒のことだ、こんなのみたら……

「休日だからと言って、弛んではいか……」

……死ぬな、俺。殺されるな。100%殺されるな。

箒の目からは俺が二人の裸体の美少女を左右に甘い時間を過ごしているように見えるのだろう

でも諦めてなるものか！ 箒も人の子！ 俺の存亡の懸けた、

対話のはじま（ry）あ、……あ、あ………

「ちっ、ちがつ、違うんだ筈！これにはわけが「無作法な奴だな夫婦の寝室に」「こら、私と一夏くんの愛の巣に入るだなんて無礼だね」「」

「ふ、夫婦うツ！？それにあ、愛の巣だとお！？」

あ……説得は不可能だな

「こ、この不埒者がああッ！！！！」

筈の放った袈裟斬りは、理論上あり得ない速度をだしていましたとさ

### 磨美 side

「磨美りん！」

「ん？」

放課後、寮に帰ろうとしていた私の所に、サッチーがやって来た。

「まずはおっぱいもま「シャイニングフィンガー！」おおっと！両手でダークネスフィンガー！」

私がサッチーに向かって突き出した手は、見事にかわされ、サッチーが突き出した両手は私の胸を見事に捉えた。

「あんっ！」

「ふっふっふっ、私を舐めてもらっては困るのだよ！」

「わかったから……手を離して」

「りょーかーい！でもちよっと揉ませて」

そう言ったサッチーはちよっと私の胸を揉んでから、手を離れた

「やっぱり柔らかいね〜。うんうん」

「で……なにかな、サッチー？」

「もうすぐ校外特別実習期間だからさ〜、ね？水着買いにいかない？今度の日曜にさ？」

「う〜ん……スクール水着で十分だとは思っただけだなあ……」

「甘い！砂糖を溶かした蜂蜜を練乳に入れたぐらい甘いよ磨美りん  
！」

「それ確実に糖尿病になるよね？」

「なるよ？うちの兄貴がそれを私に飲ませたせいで小学生の頃入院  
したもん」

「ええー……」

「ま、今は完治したから甘いもの食べても平気なんだけど、量は抑  
える」



「そ、そうなんだ……」

いきなりのサツちーの暴露話に若干引いてしまった。

「話がかなりずれたね、で磨美りんはスクール水着で十分だと思ってるみたいだけども、サツちーのその大きく育ちすぎたおっぱいがスクール水着に収まりきるとは思えないのだよ！それに貧乳の子への当て付けみたいに思われるし」

「サツちー、今NGワード言っちゃったね」

「え？」

「誰が貧乳じゃゴラアアアアア！」

その声が聞こえた方向を見ると、全力疾走で周りの女子のスカートを舞い上げながら走ってくる鈴ちゃんがいた

「中国四千年の歴史キーーック！」

「わあっ！」

鈴ちゃんが放った飛び蹴りは、サツちーの胸に直撃した

「……や、アーデルん」

「や、鈴ちゃん」

「ウェツホ、ゲホツ！よかった〜胸が衝撃を吸収してくれ」石破天驚拳！「ぎゃふう！」

サッチーは鈴ちゃんが放った石破天驚拳（という名の拳骨）で意識を掠め取られた

「鈴ちゃんは水着どうする？ 買うの？ はたまたスク水？」

「アタシは買うつもりよ？ オシャレとかしたいしさ」

「じゃあ私も買おっかな」

「そうしたら？ ただ私への当て付けみたいのだったら……」

「わかってるよ鈴ちゃん。露出は抑えるから」

「わかってんじゃん！ じゃっ、アタシはアリーナ行くしね！ アーデルんも来るなら来てもいいわよ」

「ううん、遠慮しとく。ありがとね鈴ちゃん」

「そ、じゃまたね」

そう言って鈴ちゃんは走っていった

「そっか、鈴ちゃんも買うつもりなんだ」

どんな水着を買おうかなあと考え、私はサッチーを引きずりながら、寮に帰った

ライバルが増えたけど、私は私なりに一夏くんにアプローチするだけ！（後書き

皆さんよいお年を！

## 疑似ISの説明（前書き）

重要なものだから説明！

## 疑似ISの説明

ロー・エーカーが使っていた疑似ISの説明です

疑似ISとは、エミリア・アズナブルがISコアを独自に研究、そしてそれに近いものを開発した物である

ISと互角に戦えることから、女尊男卑の風潮をなくすことができるとエミリアは思っている。

とはいえISの劣化版のようなものなので後付装備などはISと比べるとかなり狭い、さらに何故か男性にしか反応しない

エミリアはISコアと疑似ISコアを同じ数、つまり467個しか作る気はないのだが、篠ノ之東がISコアの生産を再開した場合は数を増やそうと思っている

疑似IS スサノオ

ロー・エーカー専用機にして、世界初の疑似IS。

外見はガンダム00のスサノオ。武装もそのまま刀と腹部ビーム砲

トライバニッシャー

ISの武装の技術をフィードバックして作られているためISの第三世代機に相当する

2012年初投稿。水着はやっぱり……（前書き）

本編としては初投稿です

2012年初投稿。水着はやっぱり……

「晴れたね〜サッチー」

「そだね、磨美りん！」

日曜日、私とサファイ・マーキスは買い物に来ていた。

あ、サッチーをフルネームで呼んだのは名前を忘れないためね、忘れてたら大変だし

日曜日ということもあって、人が多い。探せばリア充の人たちがたくさんいることだろう

「にしても磨美りんの服おしゃれだね」

「そうかな？」

いま私が着ている服は、ベージュのキュロットに半袖の白い無地のTシャツ、その上に、白いロングニットカーディガンを着て頭に麦わら帽子をかぶっている

「サッチーもおしゃれだと思うよ」

「そお？すごくラフにしたつもりなんだけど」

サッチーはそう言ってるがホントに仕上がってて、まずカーキ色のハーフパンツに緑色のロングタンクトップ（胸を強調するためにノーブラらしい）、その上に黒いONEボタンベストというもの

「さてさっさと水着売り場に……」

「どしたのサッチー？」

「いや、あれ……鳳さんとセシリアさんだね」

サッチーが指差す先には、某家政婦（承知しましたの方じゃないよ？）のように物影から何かをみている鈴ちゃんとオルコツちがいた

「……ほつとこつ、サッチー。ろくなことにならなさそう」

「だね。行こう行こう」

私はサッチーに促され、水着売り場に向かった

「どれがいいかな？」

私が手に持った水着はピンクのフリフリのビキニだけどこれは子供っぽいから無し。

「……これは迷っちゃうなあ。試着しよつと！」

私は二つの水着を手に取り、試着室に向かった

「あれ？あれって……シャルルくんと一夏くん？」



私が試着室に向かっていたらシャルルくん………あつ、シャルロ  
ットさんが一夏くんの手を引いて、どこかに向かっていた

「ついてってみよつと」

私はその二人をバレないように尾行した

そこで衝撃の場面に出くわしてしまった。シャルちゃん（長いから  
以後こう呼ぶ）が一夏くんの手を引いて、試着室に入っちゃったのだ

「……ぷっつーん……」

シャルちゃん、最近一夏くんを独占しすぎじゃない！？

一回一緒にお風呂入ったからって、試着室に一緒に入るのはおかし  
いよー！

「ドカスが……！！！」

私は試着室のカーテンを手に持ち、そしておもいつきり開いた

「わあっ！アーデルハイトさん！？」

「ま、磨美っ！？」

「二人とも……お説教してもらわなきゃねえ……」

おーおー、二人とも顔が段々青ざめてきたよ！



「それがいいよ、うんうん。……隙ありい！」

私は無防備なシャルちゃんの腰に手を当て、擦り始めた

「えっ！？わっ、あはは！やめっ！くすぐるのはダメっ！腰は弱いんだって！ひやはははは！」

「ええい！よいではないか、よいではないか！こちよこちよっとな！」

その後、いきなり登場してきた織斑先生と山田先生に三人（私と一夏くとシャルちゃん）揃って殴られ、説教をくらった

2012年初投稿。水着はやっぱり……（後書き）

次回は遂に！臨海学校だ！

夏だ！海だ！アプローチ合戦だ！（前書き）

かなりエロいです。

夏だ！海だ！アプローチ合戦だ！

「海だー！」

その言葉を皮切りに、みんなが騒ぎ始める。

だけど、今の私にはそんなことはどうでもいい。

何故かというと……

「うゝぎもゝぢわゝるいゝよゝゝ」

「大丈夫？磨美りん？窓開けよつか？」

「うん……お願い……」

IS操縦者、しかも専用機持ちがバス酔いになってどうすんだというのは放っておいてほしい。

私はサッチーが開けてくれた窓から吹いてくる風を感じながら、酔いをさましていた

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと座れ」

織斑先生の言葉に反応して、私はバスの窓を閉じた

かなり酔いはさめたとおもつ。

織斑先生の言葉通り、程なくしてバスは旅館に到着した

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくおねがいしまーす」「」」

みんなにつられて私も挨拶をする

でも百人単位が同時に挨拶するとなかなか迫力あるね。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね  
そう言って優しく微笑んでくれたのはおそらくこの旅館の女将さんだろう」

そのあと少しの間、織斑先生と女将さんが話していた。

「ふふつ、それじゃあみなさん、お部屋のほうにどうぞ。海に行かれる方は別館のほうで着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員に聞いてくださいまし」

『はい』と返事をして私は割り振られた部屋に向かい、さあ！い

ぞ海へっ！

（女子更衣室）（声のみで我慢してください）

「わ、ミカってば胸おつきー。また育ったんじゃないの？アーデルちゃんも？」

「きゃあっ！も、揉まないでよお！」

「揉みたいなら好きなだけ揉んでもいいよ？」

「じゃあ遠慮なくっ！」

「ひゃっ！サッチー揉みすぎだよ！」

「ええい、よいではないか？よいではないか？」

「ふう……大変だった。でもこれで一夏くんにアピールできる！」

私が着ている水着は青と白のボーダーのビキニだ。

ビキニに胸が収まりきらなかったから胸が普段のEスーツより露出しちゃっている。

俗に言う極小ビキニを着ている状態だ



「海だ、海だ」

そう言っつてサッチーがやって来たんだけど……

「サッチー、その水着の柄……」

「ん？見てわかんない？メロンだよ？」

サッチーはメロンみたいな柄のビキニを着ていたのだ。

いやもうここまで来たら当てつけだよ。鈴ちゃんへの。

サッチーの胸は果物で言うとメロン級だから

私？私はスイカがいいとこかな？

鈴ちゃんがサッチーに会わないことを祈ろう。

「あ！織斑君だ！」

なに！？ならば早速一夏くんに見せてあげなければ！私の水着を！

「う、嘘！わ、私の水着変じゃないよね！？大丈夫だよね！？」

「うわ、織斑君凄いね。鍛えてる」

「一夏くん！」

「おっ磨美かっつてのわっ！」

一夏くんの背中に飛び付き、そのまま私は一夏くんの肩車に乗った

「磨美……えーと……その……当たってるんだが？」

「知ってる。だって私から当たってるんだもん」

「あー……っ！一夏あ！なにやってんのよ!？」

あ、鈴ちゃんがやって来た。

「アーデルンもなにやってんのさ！降りなさいよ！一夏が重たそうにしてるでしようが!」

「いや、まだこれぐらいなら10分は担げるけど？」

「一夏！アンタ余計なことを言わなくていいの!」

「なら鈴ちゃん、お姫様抱っこして貰いなよ。それならいいでしょう?」

「……ま、まあ？それなら考えてあげなくもないけど……?」

「あのなあ……二人一緒に俺にくっつかれても重くなるだけなんだが……」

「そんなことはどうでもいい！一夏!とつと私を担ぎ上げなさいよ!」

「はあ……わかったよ」

そう言った一夏くんは私を肩に乗せたまま、鈴ちゃんをお姫様抱っこした。

おお、これぞまさしくおんぶに抱っこ……って違うか。てへぺろ！

「あつ、あつ、ああっ！？な、何をしてますの！？」

げ、やば。オルコツちがやって来た。

「何って私は肩車。鈴ちゃんはお姫様抱っこ」

「あるいは私を抱きながらの移動監視塔」

「「こっこかよ、鈴」

「そりゃそうでしょ。あたし、ライフセーバーの資格とか持ってないし」

「私もね。でも溺れてる人がいたら助けるよ？」

「あたしもそうね」

「わ、わたくしを無視しないでいただけます！？」

あ、つい鈴ちゃんと話し込んだじゃった。

「とにかく！アーデルハイトさんと鈴さんはそこから降りてくださいー！」

「「やだー！」」

「な、なにを子供みたいなことを言って……！」

ザクツ！とオルコツちが持ってたパラソルを乱暴に砂浜に刺した

「なにになに？なんか揉め事？」

「って、あー！お、織斑君が肩車とお姫さま抱っこしてる！」

「ええっ！いいなあっ、いいなあ〜！」

「きつと交代制よ！」

「そして早い者勝ちよ！」

あ、ちょっとまずいかも。一夏くんが困りそう。

「り、鈴。磨美。降りろ。誤解が広まる」

「了解 よつと！」

「ん、まあ仕方ないわね」

私と鈴ちゃんが降りたら一夏くんがやつと前が見えるとかいってた。

多分、ていうか100%私の胸が一夏くんの視界を遮ってたんだろう

胸が大きいというのはなにかと不便だなあ。

ガスッ！

「あつ、熱い！焼ける！焼けちゃう！」

「アーデルん今自分の胸が不便だと思ったでしょ」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！鈴ちゃんごめんなさい！だから乗っかるのやめて！火傷しそう！」

「『許してください、お姉さま』って言ったら退いてあげるわよ？」

「ゆ、許して！許してください！鈴お姉さま！」

「よーし上出来よ！海で冷やしてきなさい！」

鈴ちゃんから解放されたあと私は海へ体を冷やしに向かった

「あらら、どうしたの磨美りん。涙目になっちゃって？」

「砂浜に体を押し付けられたから冷やしてるの」

「ふーん……いったんだけ！」

サッチーがそう言った時、私の胸が何かから解放されたような感覚が胸から伝わってきた

そしてサッチーの手には私が着てた水着が。

「えっ？あつ！こら待てー！私の水着返せー！」

「返して欲しかったらとりかえしてごら〜ん！」

その後しばらくサッチーから私の水着を奪還するために追いかけていたのだが

「織斑君！これパス！」

「えっ？……？なんだこれ？」

「あっ！ああっ！一夏くんそれ、私のだから、ね？返して？」

「磨美の？ってだああっ！」

一夏くんは私の水着を手放してしまい、そしてその水着はどこかに流されてしまった

「あーっ！高かったのに！5000円もしたのに！」

「あ………わるかった。」

「一夏くんのバカ、エッチ、ラッキースケベ！」

「すみませんでした」

「うっ………一夏くん、更衣室まで運んでよ………予備の水着があるから………」

「わかった。浜まで連れてくから背中に掴まってるよ」

「うん」

一夏くんの背中にくつつき、浜まで運んでもらっている最中、感じた一夏くんの体温はとても温かった。

「あら？一夏さんどうされましたの？」

「おおセシリアか、いいところに来た。そのパレオ、貸してくれないか？」

「い、一夏さん！？な、何をいきなり！」

「いや、磨美の水着が流されてしまったからそのパレオでなんとか隠せないかなと思ってさ」

「ならラウラのを使いなよ、一夏」

あ、シャルちゃんと……ああ、ラウラさんがやって来た。

ラウラさんはバスタオル体に巻いていてミイラのような状態でシャルちゃんの隣にいる

「し、シャルロット、それは困る……」

「え？なんで？」

「こんな恥ずかしい格好、嫁には見せれん………！」

「へー、でも今の状態が一番恥ずかしいと思うよ？僕はね」

「くっ……。ああもう！このタオルを脱げばいいのだろう！脱げば！」

そう言ってバスタオルを私に向かって投げつけてきたラウラさんはその可愛い水着姿を披露した

「笑いたければ笑うがいい……」

「似合ってると思うぞ？俺は。それにかわいいし」

「かつ、かわいいっ……!?!?」

一夏くんの言葉に反応したラウラさんは凄いスピードで走り去っていった

うん、そういう所がかわいいんだよ、ラウラちゃん

「あっ、ラウラちゃんこれ借りるねー!」

「勝手にしろー!」

私は片手で胸の大事なところを隠しながら、バスタオルを手にとった。

さてさて、二着目を着てこなくちゃ



夏だ！海だ！アプローチ合戦だ！（後書き）

磨美の二着目の水着は告白の時のお楽しみ〜！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4625v/>

---

<インフィニット・ストラトス> 金と銀の瞳が見据えるモノ

2012年1月10日08時48分発行